

42277

教科書文庫

| |
|----------------|
| 4 |
| 810 |
| 42-1930 |
| 20000 26459 |

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19

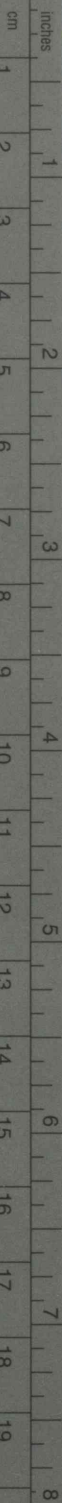


© Kodak, 2007 TM: Kodak

Kodak Color Control Patches

Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



375.9
Ta11
資料室

日本女子讀本 卷八

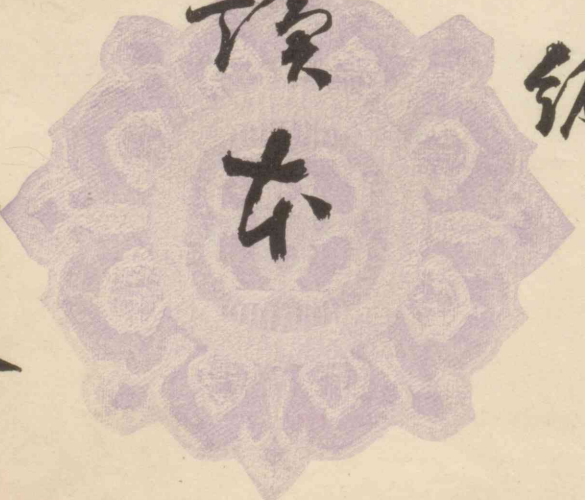


文部省檢定
昭和五年二月十八日
高等女子學校國語科用

文學博士言本武編

日本女子讀本

東京 寫山房藏版



資料室

375.9
Tall

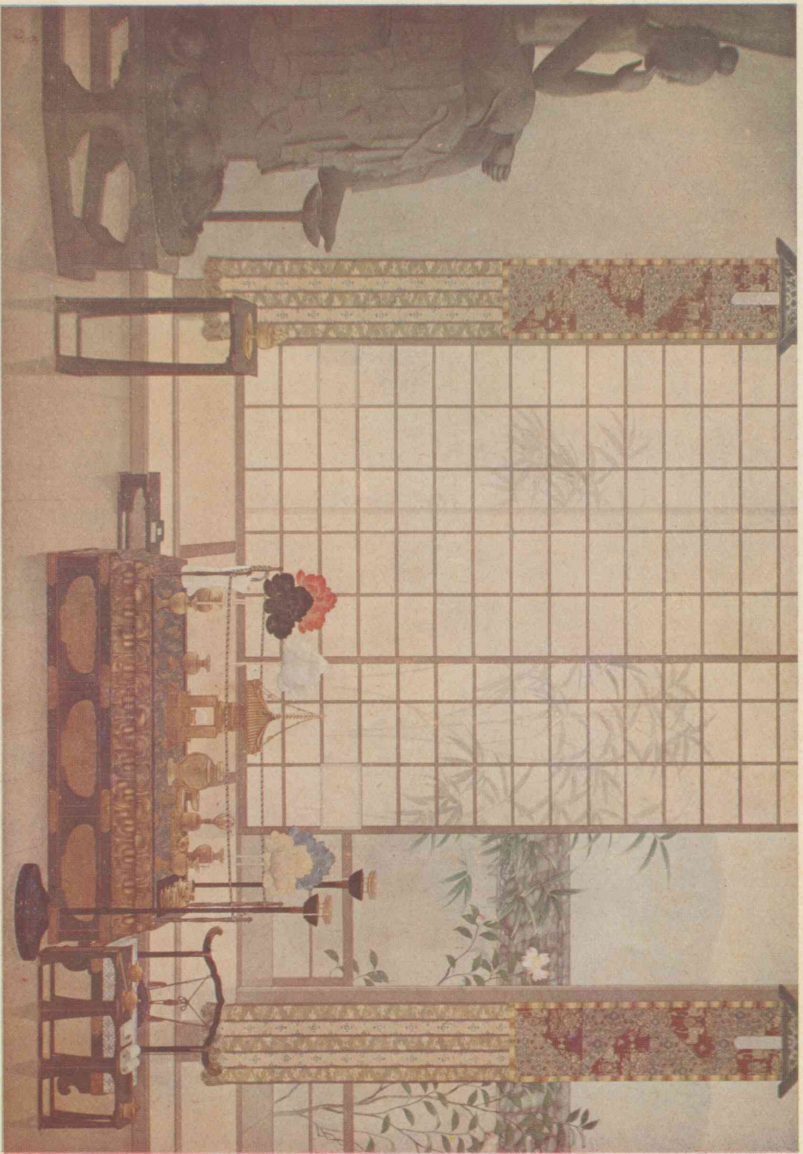
廣島大學圖書印

| | |
|------------|----------|
| 屏 | 表紙 |
| 同 | 御物上代染織文 |
| | 深茶地花卉羊文錦 |
| 淺縹地唐花大文錦 | |
| (帝室博物館許可濟) | |



廣島大學
圖書印

広島大学
教
26459
圖書



筆天彩村田 日冬舍精

日本女子讀本 卷八

目次

| | | | |
|---|----------|-------|----|
| 一 | 女性と文學的教養 | 本間久雄 | 一 |
| 二 | 朗詠 | | 三 |
| 三 | 銀の猫 | 上田秋成 | 九 |
| 四 | 菅公の左遷 | (大鏡) | 三七 |
| 五 | 野村望東尼 | 佐々木信綱 | 四 |
| 六 | 中宮寺の觀音 | 和辻哲郎 | 四 |
| 七 | 檀園文抄 | 中島廣足 | 五 |
| | 一落葉 | | 五 |

| | | |
|---|--------|------|
| 二 | 夜學 | 五 |
| 三 | 杜 | 五 |
| 四 | 埋火 | 五 |
| 五 | 漁村 | 五 |
| 六 | うまやぢ | 五 |
| 八 | 心の落葉 | 九 |
| 一 | 理智と情操 | 九 |
| 二 | ひざまづく心 | 九 |
| 三 | 眠に入る時 | 九 |
| 四 | 率直 | 九 |
| 九 | もう一つの鏡 | 九 |
| | | 太田正孝 |
| | | 空 |

| | | |
|----|----------|-------|
| 一〇 | 信乃の生立 | 九 |
| 一一 | 朝日の前 | 九 |
| 一二 | 冬の追想 | 九 |
| 一三 | 伊勢物語抄 | 九 |
| 一 | 一 惟喬の皇子 | 九 |
| 二 | 二 さらぬ別 | 九 |
| 一四 | 古今調と新古今調 | 九 |
| 一五 | 梅花の氣品 | 九 |
| 一六 | アテネの夕日 | 九 |
| 一七 | 壇の浦 | 九 |
| 一 | | 源平盛衰記 |
| | | 二五 |

東京大学
図書印

日本女子讀本 卷八

一 女性と文學的教養

本間久雄

現代の女性に要求したいさまざまの文化的教養の中で、特に最も重大なものとして、私の要求したいと思ふものは文學的教養である。

このことを明らかにするには、文學的教養といふことがどういふことであるかをまづ明らかにしなければならぬ。

文學的教養といふのは、文學を味はふことによつて、その人の人格を深め、廣め、高めるといふことである。即ち文學による教養である。さて、それならば文學を味はふことによつて、どうして我

| | | |
|----|--------------|--------------|
| 二 | | 二元 |
| 一八 | 日野山の閑居..... | 鴨 長 明・二六 |
| 一九 | 隅田川の水..... | 島 崎 藤 村・三三 |
| 二〇 | 隅田川..... | (觀世流謠曲)・三七 |
| 二一 | 人間生活の要素..... | 大 類 仲・四四 |
| 二二 | 國學者の業績..... | 岩 城 準 太 郎・五五 |

私の人格が深められ、廣められ、高められるか。それは外でもない。文學は、いはゆる「もののはれ」を感受させ、味得させるからである。

それならば、轉じて「もののはれ」とはどういふ意味であるか。このことを明らかにすることは、とりもなほさず文學的教養といふことを解説することである。

「もののはれ」といふことには、さまざまの意味がある。この言葉を用ひる人によつて、また同じ人でも、用ひる場合によつて、ここにさまざまの意味が生じて來る。例へば、兼好法師の「徒然草」の中にも、あだし野の露消ゆる時なく、鳥邊山の煙立ち去らでのみ住みはつるならひならば、いかにもののはれもなからん。などいつてあるこの「もののはれ」は、人間に死といふことがなければ、悲しみがなからうといふので、普通にいふ悲しみ、または哀傷

などの意味である。しかし同じ兼好法師が、人間は、あらゆる動物の中で、一番長生きをするものであるにかゝはらず、いつまでも長生きをしたいといふ欲心が盛なのは困つたものだといふことを書いて、ひたすら世を貪る心のみ深く、もののはれも知らずなりゆくなんあさましき。といつてある場合は、前とは些か趣が異なつて、單に悲しみといふよりは、よほど複雑なものになつてゐる。文學が「もののはれ」を知らしめるといふ場合の「もののはれ」は、いふまでもなく單なる悲しみとか哀傷とかいふ意味のそれではない。それは、つと複雑なものである。

「もののはれ」に就いては、國學者本居宣長の説くところが最も正しい見解で、今日の我々にも十分傾聽に値するものである。宣長は、まづ「あはれ」といふ言葉の意義から始めて、次のやうにいつてゐる。

「あはれ」といふは、もと、見るもの、聞くもの、觸るゝことに心の感じて出る嘆息なげきの聲にて、今の俗言よのこゝばにも「あゝ」といひ、「はれ」といふこれなり。例へば、月花を見て感じて、「あゝ、見事なる花ぢや。」はれ、よい月かな。」などといふ。「あはれ」といふは、この「あゝ」と「はれ」とのかさなりたるものにて、漢文にて嗚呼などある文字を、あゝと讀むこれなり。

即ち宣長の説明でもわかる通り、「あはれ」といふことは、よきにつけ、あしきにつけ、物に感ずることをいふのであつて、「ものはただ添へていふこと、例へば、たゞ、いふ」といつてよいところを、「ものはれ」といつたり、たゞ、かたる」といつてよいところを、「ものはれ」といつたり、その他、ものまうで、「もの見」ものいみなどいふたぐひで、「ものあはれを知る」といふことは、宣長の言葉を借りていふと、「何事によれ、感ずべきことにあたりて、感ずべきこと、るを知り

て感ずる」をいふのである。即ち感受性をいきゝゝと活かせるといふ意味である。宣長は續けていふ、必ず感ずべきことにありても、心うごかず、感ずることなきを、ものあはれ知らずといひ、心なき人とはいふなり。ものわきまへ心ある人は、感ずべきことにはおのづから感ぜずはえあらぬに、さもあらぬは、何とも思ひわくかたなくて、必ず感ずべき心を知らねばぞかし」と。

そして宣長に従ふと、文學はこの「ものあはれ」を知らしめるものである。宣長は、ものがたり即ち小説の意義を説いて、次のやうにいつてゐるが、これは移してもつて文學全體の意義を説いたものだといふことが出来る。即ちいはく、

「ものがたりは、世の中にありとあるよきこと、あしきこと、めづらしきこと、をかしきこと、おもしろきこと、あはれなることなどのさまざま、を書きあらはして、つれづれなるほどのもて

あそびにし、または、心のむすぼれて、もの思はしき折などのなぐさめにもし、世の中のあるやうをも心得て、もののあはれを知るものなり。

いかにもおもしろくいつてゐるではないか、即ち善いことでも、悪いことでも、珍しいことでも、をかしいことでも、おもしろいことでも、あはれなことでも、何によらず、さまざまの事柄を書表して、世の中の有様、世の中のすがた、世の中のありのまゝの状態を感じさせ、味ははせて、以て、もののあはれを知らせるのが文學だといふのである。

「古今集」の有名な序文にも、

「やまと歌は、人の心を種として、よろづの言の葉とぞなれりける。世の中にある人、事わざしげきものなれば、心に思ふことを、見るもの、聞くものにつけていひ出せるなり。花に鳴く鶯、水

に住む蛙の聲を聞けば、生きとし生けるもの、いづれか歌を讀まざりける。力をも入れずして、天地を動かし、目に見えぬ鬼神をもあはれと思はせ、男女の中をもやはらげ、猛き武士の心をも慰むるは歌なり。」

といつてあるが、かやうに歌が人の心を感動させるのも、つまり人の心に「もののあはれ」を知る特殊の感情——感受性があるからであるといへるのである。

文學によつて、もののあはれを知るといふことは、だから世の中のあるやう、即ち世の中のさまざまの人間關係を、たゞに表面的だけではなく、底の底まで立入つて、深く、しみと、味はふといふことを意味するのである。今日の新しい言葉でいふと、全關的、または全圓的な人生味とか、或は全體としての人生の味はひなどいふ意味である。そしてかういふ全體的な味はひを味得

させ、感知させるところにこそ、實に文學の人生にもたらす大きな効果があるのである。

だから、文學を本當に味はつてゐる人、即ち眞に「ものあはれ」を感じてゐる人と、さうでない人とでは、その人の内生活は大變に違つてゐる。

文學を味はつてゐる人は、全體としての人生を見るから、同情心が非常に豊かである。だから、こゝに例へば極悪無道の人間があつても、その人は決してそれをすぐさまに極悪無道の人間としては取扱はない。どうして、一般の人と同じ人間でありながら、彼ばかりがさういふ極道者になつたかといふ徑路をまづ初に考へる。事實、傑れた文學は、その作者もさういふ同情心の深い、豊かな人であるから、その文學作品にも、おのづからさういふ同情心が満ち溢れてゐるのが常である。

「ものあはれ」を知るといふことは、かういふやうに、決して表面的にもものを見ることではなく、底の底まで人間關係を味ははうとするのであるから、人間のもろ／＼の心の影といふものを味得することが、また文學的教養の非常に重大なところで、これに就いても本居宣長は大變おもしろいことをいつてゐる。それをざつとかいつまんで述べてみると、一體、人間は深く思をめぐらした場合には、右か左かといふやうにはつきりと心の傾向が定まるものではない。むしろ、とやかくと、くだ／＼しく、女々しく、亂れあひて、定まりがたく、さまざまの影多かるものであつて、この心の影を描いたのが傑れた文學である。随つて、文學を本當によく理解するといふことは、ちよつと表面から見ただけではわからない。この心の影を、よく感じ味はふことであるといふのである。

かやうなぐあひで、とにかく文學を本當によく味はつた人、即ち文學的教養のある人と、さうでない人とでは、人生の見方が大變異なつてゐる。文學的教養のない人は、悪人を見ると、その悪いところだけを見るし、善人を見ると、その善いところだけを見る。つまり善玉悪玉——と人間をかう二種類に定めてしまふ。それだけその人は單純なのである。文學的教養のある人は、人間が決してそんな單純なものでないことをよく知つてゐる。その人は、表面からは見えない人間の心の影を十分に洞察するのであるから、それだけその人の人格は複雑であり、豊かであり、味はひに富んでゐる。言葉を換へていふと、それだけその人の内生活は豊富で、人格が深く、高く、廣いのである。

蓋しかういふ人格を贏得ることは、人間として幸福であるばかりでなく、また實に必要なのである。人間は何といつても社會

的動物であるから、人間の生存に最も必要なのは協力共同の精神である。かういふ精神を養ふには、上に述べたやうなもののはれを知り味はふことによつて、人生に對する同情心を鋭くし、深くし、豊かにすることが最も有效な途だからである。

だから文學を味はふこと——文學的教養を積むことは、苟も文化國の人間としては、いかなる人も、男女を問はず必要なのである。

それならば、特に婦人にとつてその必要な所以はどこにあるか。

それは外でもない。婦人はその本來の性質上、男子に比して一層このもののはれを感じ得る素質をもつてゐるからである。女の感情は、男のそれが、どちらかといへば粗く、鈍く、かたくななのに比べて、細く、鋭く、柔らかであるから、一層多く、もののは

れを感じずる能力をもつてゐるわけである。それにもかゝらず、女性はいまだに男に比して、この「もの」の「あはれ」を感じずる準備——文學的教養が積まれてゐない。たゞ素質があるだけで、その素質を十分に生し伸すことが出来なかつたのだ。だから、今日において、一層多く文學的素質を積むことによつて、もの「あはれ」を知り感ずるその素質を一層生し伸すことに、今日の婦人は留意してほしいのである。當來の社會の基礎の一つとなるべき女性文化の建設といふことも、考へやうによつては、文學的教養を積んだ女性の間からのみ贏得られるはずだからである。

二期詠

早春

都良香

氣霽レテハ風新柳ノ髮ヲ梳リ、氷消エテハ浪舊苔ノ鬚ヲ洗フ。

氣霽風梳新柳髮。氷消浪洗舊苔鬚。

平兼盛

みわたせば比良の高嶺に雪消えて若菜つむべく野はなりにけり

春興

劉禹錫

野草ハ芳菲タリ紅錦ノ地、遊絲ハ繚亂タリ碧羅ノ天。
野草芳菲紅錦地。遊絲繚亂碧羅天。

山邊 赤人

も、しきの大宮人は暇あれや櫻かざしてけふもくら
しつ

郭公

一、山鳥、曙雲、外、
萬點、水螢、秋、草、中、
さつき、みやみおほ
つかなきにほと
こゑのいとよなる
るけき

「集詠朗漢和」
(筆成行原藤傳)

納涼

源 英 明

池冷シウシテ水ニ三伏ノ夏ナク、松高ウシテ風ニ一聲
ノ秋アリ。

池冷水無三伏夏。松高風有一聲秋。

中 務

したくゝる水に秋こそかよふらしむすぶ泉の手さへ
涼しき

秋 月

郢 展

秋水漲リ來ツテ船去ルコト速ク、夜雲收リ盡クシテ月
行クコト遅シ。

秋水漲來船去速。夜雲收盡月行遅。

凡 河 内 躬 恒

白雲にはねうちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋の
夜の月

擣 衣

劉 元 叔

北斗ノ星ノ前ニハ旅雁ヲ横タヘ、南樓ノ月ノ下ニハ寒衣ヲ擣ツ。

北斗星前横旅雁。南樓月下擣寒衣。

紀貫之

からころもうつこゑきけば月きよみまだねぬ人を空に知るかな

雪

白居易

雪ハ鷲毛ニ似テ飛ンデ散亂シ、人ハ鶴氅ヲ被テ立ツテ徘徊ス。

雪似鷲毛飛散亂。人被鶴氅立徘徊。

坂上是則

み吉野の山の白雪つもるらしふるさと寒くなりまさ

るなり

松

源順

十八公ノ榮ハ霜ノ後ニ露レ、一千年ノ色ハ雪ノ中ニ深シ。

十八公榮霜後露。一千年色雪中深。

大江朝綱

雨ヲ含ムノ嶺松天更ニ霽レ、秋ヲ焼クノ林葉火還ツテ寒シ。

含雨嶺松天更霽。燒秋林葉火還寒。

源宗子

常磐なる松の緑も春くれば今ひとしほのいろまさりけり

祝

嘉辰令月歡極リ無ク、萬歲千秋樂シミ未ダ央バナラズ。

嘉辰令月歡無極、萬歲千秋樂未央。

滋慶保胤

長生殿ノ裏ニハ春秋富ミ、不老門ノ前ニハ日月遅シ。

長生殿裏春秋富、不老門前日月遅。

詠人不知

わが君は千代に八千代にさゞれ石の巖となりて苔の
むすまで

謝

偃

文治
後鳥羽天皇の
御代、鎌倉の大將
源頼朝

三銀の猫

上田秋成

文治その年の秋八月十五日、鎌倉の大將殿、鶴が岡の宮居に
詣でさせ給ふ例のことにて、御供仕うまつる人々、御前追ひ、御後



(像陶) 成秋田上

世にいかめしく尊き御有様なり。

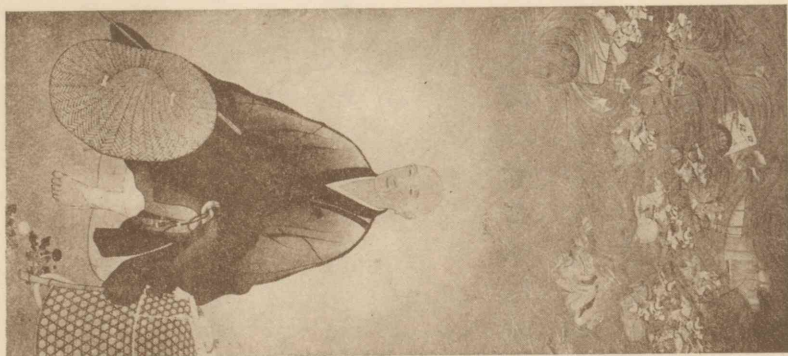
返りまをしまして、御手輿に召させ給ふほど見留めさせ給ひ、御
階の忌垣のもとに畏まりある法師のあるが、見上げ奉る面つき、

石の
垣
法師
ある
面つき

賢き人云々
 周の文王が太
 公望を得た故
 事を指す。

旅に飢ゑて、いと瘦黒みづきたるに、衣杖笠なども乞食者のさま
 したる、なほ人ならずや思しけん、あの法師が修行するやう、名を
 も問へ。と仰せ給ふ。御輿添の若侍急ぎ走り寄りて、有難く御目給
 へり。いづこよりの修行ぞ、名をも申せ。といふ。ゆくりなきに驚き
 たるさまして、雲水に在所定めずはべるものにて、名は圓位と申
 す。といふ。聞き召されて、さればこそ聞知りたれ。穴熊の猛き獲物
 の類ならで、賢き人得たる例に誘ひ歸らん。我が後につきて來れ
 といへ。と召しつれさせ給へり。

御館に入らせ、御装束改めさせ給へば、やがておほとなぶらあ
 また照らしかゝげたり。今日の道行づとゐてこ。と仰せ給ふ。法師
 まゐれ。とて、御座近き簀子に召されたり。大將殿見おこせ給ひて、
 昔は藐姑射の山の御宮仕せし人の、世をはかなきものに思しし
 みて、身は黒くやつしたれど、月花の譽は、ものの心なきあづま人



西行法師

佐々木尚文筆

伊勢の海云々
一伊勢の海千尋の濱にひる
ふとも今は何
てふかひかあ
るべき(致忠
朝臣(後撰集
卷十三所載)

さへ聞知りたるぞ。八百日ゆく濱の眞砂の中には、玉とて拾ひ收
めたらんを、語りて聞かせよ。」と仰せ給ふ。

「いと輝かしきにぞたゞ夢路をたどるやうにはべりて、聞え
奉るべきこともはべらず。さとき御眼に見顯されてはべるこそ、
いと有難けれ。伊勢の海千尋の濱におり立ちならひはべれど、
かひあることもうち出ではべらぬには、これとて捧げ奉るべく
もあらず。君にもかねて學ばせ給ふとも漏りきき奉る。天の下ま
つりごち給ふ御器物の大なるに思し寄せ給ふには、かけて
も及ぶまじきをさへ思し知りはべる。大空に羽うちつけて飛ぶ
鶴の聲、霜枯の淺茅が下の蟲の音、いかで取りなめて聞ゆべき。あ
な畏し。」と申す。

うち笑ませ給ひ、弓取りし人のもと心の猛きには、詠む歌も
直く明らさまにと聞くは實か。歌は武士の荒々しき心には詠み

大風起り云々
漢の高祖の
「大風歌」の詩
句。
烏鵲南に云々
魏の曹操の
「短歌行」の詩
句。
昔宮中で染物
を取扱った所
染殿

得まじきものに、宮人たちはさたし給へりとや。軍に出で立ちて、
笛鼓の音、馬のいなゝきはものとも思はぬを、この三十文字餘り
の學には心の後るゝはいかに。「こは畏き御心にも思し惑はせ給
ふものか。古の代々の帝は、馬に鞍おき、御弓矢取らして御軍に立
たせ給ひし。その御歌を讀み見奉れば、猛く直々し、調もいと高し
とこそ聞きわたりはべれ。いでや歌詠まんとては、ますらを心を
とり隠し、あてになよびかにのみ詠みいでまくするこそ、この道
のいみじき煩なれ。君がさとく猛き御心のまゝにうちまねばせ
給はんには、今の世の人誰かは並びあひ奉らん。三尺の劍を取り
て「大風起り雲飛揚す。」と歌ひ、槊を横たへて「烏鵲南に。」と詠ぜし君
たちは、鞍の上にて文に遊ばせ給ふならずや。玉造等がいみじく
磨りみがきたるも、染殿のやしほの色も、はかなき目移りばかり
は何にかは。されど、谷深き鶯の聲、信濃路出づる荒駒の歩み、いづ

秀郷
藤原氏。



(像木)師法

れの道、いづれの業にも、初より優れたたらんは鬼にこそはべらめ。
といふ。人々あれ聞き給へ。世は捨て遁るとも、頼もしき人の心な
らずや。圓位よ。汝が遠つ祖の秀郷といひしは、世にいみじき
弓の上手となん聞ゆる。傳へたることも
西あるべし。かくこそと思ひしめること
行は忘れずてぞあらん。事一言にても教へ
法承らばや。「こはます」恐ある御問はせ
師なり。御物語のはては、は、武士の道暫し
木)も怠らせ給はぬ御心より、野山を住所の
像)瘦法師にだに問はせ給ふことの忝さよ
向かひ奉りてはをこがましく、何をかは家の傳へなりなどとして
聞え奉るべき。まして有難き大宮仕を否み奉り、親たちの慈みを
さへあだなるものに思ひなして、年僅かに二十三にして家を出

病める士卒云

周代の兵學家
吳起の故事

竈を減じて云

魏の將軍龐涓
の故事

でたるいたづらものの、弦ひかんすべだに心にも留めはべらず。たゞ一言の忘れ難きは、賞を重くし、罰を軽くせよといひしと、任ずるものを辱しむれば危しといひしこととのみ、病める士卒の疽をすひしは、人の心をよく買ひなすと雖も、眞の情よりも覺えはべらず。竈を減じて人を危きに陥るゝは、將帥のさかしきにて、國を治め、天の下を知るべき君の御心にあらず。さはれ、軍を出し給へることの怪しきまで賢くおはするを、餘所ながら聞き奉るには、この方の御問、免させ給へ。とて、額を板敷にすりつけて申す。

君笑みほこらせ給ひ、口とく、心賢しき法師なり。今宵は月見る夜ぞ。人々と土器取りはやし、曉かけて遊ばん。まらうどは酒飲まざるべし。鹿猿の中に立交りて歌詠めといふとも、詠むまじ。たゞ我が前にて遊べ。飽かず飲み、ものきたなげに食散らす人々は暖

かにこそ。風冷やかなるに、この火取りて法師にまゐらせよ。とて、白銀をもて作れる猫の形したるを取傳へて、君より賜はす。とて、前に置きたり。鹿猿はなほ心猛し。鼠をだにえ捕らぬ。瘦法師がためには、げに似つかはしき御賜物ぞ。とて、三度押戴きて、翌朝御暇賜はりて立出づるに、御館の人やどりに誰人の童ならん、くゝり袴の裾朝露にぬれそぼちて、いと寒げにをるを見て、これ取らせん。火埋みして手足を暖めよ。とて、かのきら／＼しきものを與へて、顧みもせで立ちぬ。

童、うち驚きて、これ見給へ。見も知らぬ法師の、見も知らぬもの賜ひつるは、とて青侍に見すれば、目口をはだけ、かく尊き寶物を誰かは得させん。拾ひやしつる。といふ。さらに／＼、道のそらにかかるものやはあるべき。あな恐し。殿に奉りて給へ。といふ。やがて御館にもて参り、仕ふる君を呼出でて、しか／＼のことなんと申

漢高
漢の高祖、劉
邦
曹孟德
魏の武帝、名
は操。

す。いと怪し。大將殿の法師に賜ひしを、いかで童には得させけん、いぶかし。とて、まづ急ぎて聞え奉る。君うち笑み給ひ、かの似而非法師、あなづらはしく幼げなるものくれしとて、腹立たしくや思ひけん、我が門の前に棄てゆきつるよ。一度似而非者の手に穢れしもの、その童に取らせよ。とて、取りおろさせ給ひぬ。

西行後にこの事を人に語りていふ。右幕下はまことにねぢけたる君なり。口に蜜あれど、心には針のおはすらん。漢高の大度、曹孟徳の智略あるに似て、天下の人、皆この君の網の中に入れられたるは、佛の冥福といふことを生まれ得給ひけん。たゞ悲しむべきは、神の御裔の、この後やうく衰へさせ給はん世の姿なるは、とて、涙とゞめ難くして物語りしとなん。心なき身にもこれを聞傳へては、秋の夕暮ならずとも、うちひそみぬべし。

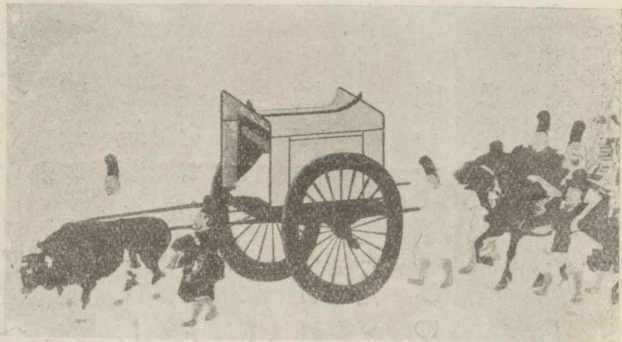
四 菅公の左遷

醍醐天皇
第六十代。

醍醐の帝の御時、時平のおとど左大臣の位にて、年いと若くしておはします。菅原のおとどは右大臣の位にておはします。その折、帝御年いと若くおはします。左右の大臣の世の政行ふべき宣旨下さしめ給へりしに、その折、左大臣御年二十八九ばかりなり、右大臣の御年五十七八ばかりにやおはしましけん、共に世の政をせしめ給ひしほどに、右大臣はざえ世にすぐれ、めでたくおはしまし、御心おきても殊の外にかしこくおはします。左大臣は御年も若く、ざえも殊の外に劣り給へるによりて、右大臣御おぼえ殊の外におはしましたるに、左大臣安からず思したるほどに、さるべきにやおはしけん、右大臣の御ためによからぬこと出で来て、昌泰四年正月二十五日、太宰權帥になし奉りて、流され給ふ。

亭子の帝
第五十九代宇
多天皇をいふ。

山崎
京都府乙訓郡
山崎村。

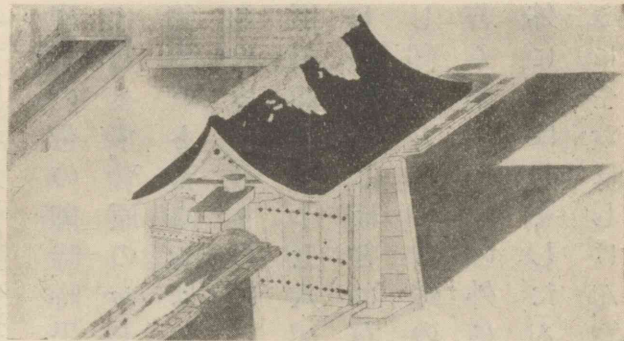


春なわすれそ

菅公都を出給ふ

また播磨の國におはしましつきて、明石のうまやといふ所に

また亭子の帝にきこえさせ給ふ。
ながれゆくわれは水層になり
はてぬ君しがらみとなりてと
どめよ
なきことによりてかく罪せられ給
ふを、からく思し嘆きて、やがて山崎に
て出家せしめ給ひてけり。都遠くなる
まゝに、あはれに心細く思されて、
君がすむ宿の梢をゆくくと
かくるゝまでもかへりみしは
や



このおと子どもあまたおはせしに、女君たちは婿取し、男君

たちは皆ほどくにつけて位どもお
はせしを、それも皆かたんに流され
給ひて悲しきにいとけなくおはしけ
る男君、女君たち、慕ひ泣きておはしけ
れば、小さきはあへなんと、公もゆるさ
しめ給ひしかば、共に率て下り給ひし
ぞかし。帝の御おきて極めてあやにく
におはしませば、この御子どもを、同じ
かたにだに遣はさざりけり。かたんに
いと悲しく思し召して、御前の梅の
花を御覽じて、

東風吹かばにほひおこせよ梅の花あるじなしとて

菅家の門の

御宿りせしめ給ひて、うまやのをさのいみじう思へる氣色を御
覽じて、つくらしめ給へる詩いとかなし。

驛長無驚時變改。一榮一落是春秋。

かくて筑紫におはしまし着きて、ものあはれに心細く思さる
るゆふべ、をちかたにところく、煙立つを御覽じて、

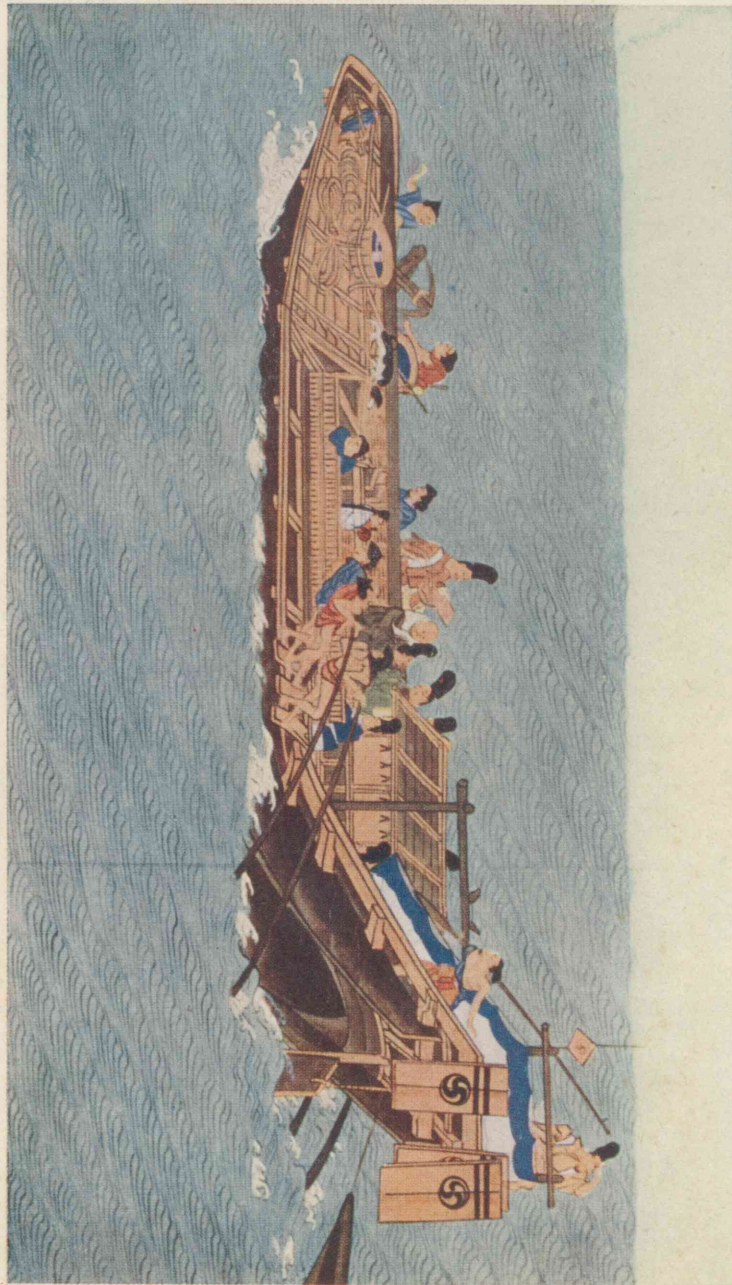
夕されば野にも山にもたつけぶりなげきよりこそ
燃えはじめけれ

また雲の浮きてたゞよふを御覽じても、

山わかれ飛びゆく雲の歸りくるかげ見るときぞな
ほ頼まるゝ

さりともと、世を思し召されけるなるべし。月のあかき夜、
海ならずたゝへる水の底までもきよきこゝろは月

ぞてらさん



(巻繪) 起發 神天崎松 ぶ給り渡へ紫筑公菅

大貳
太宰大貳藤原
興範

「文集」
「白氏文集」を
いふ。
白居易
字は樂天。唐
の詩人。

これいとかしこくあそばしたりかし。げに月日こそは照らし給
はめとこそはあめれ。

筑紫におはします所の御門も、かためておはします大貳の居
所は遙かなれども、樓の上の瓦などの心にもあらず御覽じやら
れけるに、またいと近く観音寺といふ寺のありければ、鐘の聲を
聞き召してつぐらせ給へる詩ぞかし、

都府樓纒看瓦色。観音寺只聽鐘聲。

これは『文集』の白居易の「遺愛寺鐘敲枕聽香爐峰雪撥簾看」とい
ふ詩にも、まさざまにつぐらしめ給へり。」とこそ昔の博士どもは
申しけれ。またかの筑紫にて、九月十日菊の花を御覽じけるついでに、まだ京におはしましし時、九月の今宵内裏にて菊の宴ありしに、このおとどのつぐらせ給へりける詩を、帝かしく感じ給ひて、御衣賜はせ給へりしを、筑紫にもて下らしめ給へりければ、

御覽ずるにいとどその折思し召し出でてつくらせ給ひける。

去年今夜侍清涼。

秋思詩篇獨斷腸。

恩賜御衣今在此。

捧持毎日拜餘香。



た雨の降る日うちながめ給ひて、

恩賜のれき。このことども、たゞちりたるにもあらず、かの筑紫にてつくり集めさせ給へりけるを、書いてひと巻とせしめ給ひて、後集と名づけられたり。また折々の歌を書きおかせ給へりける。おのづから世に散りきこえしなり。ま

北野
京都市上京區

北野の宮
今の官幣中社
北野神社

安樂寺
今は寺號を廢
社と號し、府神
幣中社となる。
太宰府町にあ

あめの下かわけるほどのなければや着てしぬれぎぬひるよしもなきやがてかしこにて失せさせ給へり。
夜のうちに、この北野にそこの松をおほさしめ給ひて、わたりすみ給ふこそは、たゞ今の北野の宮と申して、あら人神におはしませめれば、おほやけも行幸せしめ給ふ、いとかしこくあがめ奉り給ふめり。筑紫のおはしましし所は安樂寺といひて、おほやけより別當所司などなさせ給ひて、いとやむごとなし。

御覽ずるにいとどその折思し召し出でてつくらせ給ひける。
去年今夜侍清涼。
秋思詩篇獨斷腸。
恩賜御衣今在此。
捧持毎日拜餘香。

本寫古「鏡大」

五 野村望東尼

佐々木信綱

日本歴史上の大偉業たる明治維新の時代は、忠勇義烈な我が国民性の精髓を代表すべき幾多の義人志士を生んだ。それ等の義人志士のうちには、またもとより幾多のすぐれた妻があり、母があつた。しかしそれ等の義人志士と交はつて、婦人ながらも世の荒波と戦つて勤王の大業に盡くし、波瀾の多い生涯を送つた婦人は何人かといへば、即ちこゝに記さうとする野村望東尼である。否、望東尼はたゞに慷慨の節婦たるのみではない。彼女は我が國古來のすぐれた女歌人の一人である。

望東尼は初の名をもとといふ、筑前福岡の人である。ロシア人が蝦夷を侵して、邊鄙を脅した文化三年に、浦野勝幸といふ人の三女として生まれた長ずるに随つて容姿美しく、歌を好み、書道

文化
光格天皇の御
代、徳川十一
代、將軍家齊の
治世。

天保
仁孝天皇の御
代、家齊の治
世。

裁縫・刺繡のわざにもすぐれてゐた。同藩の士野村貞貫といふ人のもとに嫁いで後は、よくその家を治め、先妻の子をおほしたて、妻たり、母たる務をも十分に盡くした。しかもその間にかねて好める和歌にいそしんで、天保三年、二十七歳の時、夫貞貫と共に福



野村望東尼

岡の歌人大隈言道の門に入つた。言道はその名こそ多く知られないが、その歌才において近世第一流のうち、に數へられるべき歌人で、その歌風は輕妙奇拔、一種の新しみがあつた。望東尼がこの師に就

いたのは、彼女のためにはまことに喜ぶべきことで、彼女は十分に師の歌風の妙味を學び得て、師も深く許した。弘化二年、四十歳の時、家督を長子に譲つて、夫と共に福岡の郊

弘化
仁孝天皇の御
代、徳川十二
代、將軍家慶の
治世。

嘉永
孝明天皇の御
世。家慶の治

外なる平尾山の山莊に閑居した。その後、山莊に風月を楽しんだ折々の歌は、いかにも情懷の懐かしく思はれるもののみである。二三を擧げると、

春きぬとつげの小櫛もとらなくに笑ふ人だになき

山邊かな

葺きかふるものとも知らでわが庵の屋根のうねう

ねおふる姫松

雨晴れて月見る夜半はやり水の音もほどよく流れ

ぬるかな

しかもこの山莊に隠れすむ彼女の心をも動かすのは時勢の波であつた。嘉永六年、浦賀に米艦が來た時の作に、

こと國の船はうき世の浪たてていどみがほにも打

ちよせしかな

安政
孝明天皇の御
代。徳川十四
治世。家茂の四

山莊に共に住むこと十五年、安政六年七月二十八日、五十四歳の時、夫は逝つた。その時の歌に、

初秋の風に吹かるゝともし火のかげもこゝろも細

る夜半かな

彼女は直ちに剃髮して佛門に入り、その名のもとをさながらとつて望東尼といつた。

彼女の夫貞貫も、夙に勤王の志のあつた人で、山莊に移り住んだ後に、楠公の靈を祀つてこれに仕へるとか、太平記のたぐひを講ずるとかしてゐたが、いまだその時機に際せずして死んだのであつた。望東尼もかゝる人を夫として、かねて同じ勤王の志に燃えてゐたのであるが、夫を亡つた頃から、國事はますます繁くなつて、彼女の心を刺激するものが多かつた。即ち、閑居に堪へず、文久元年には和宮御降嫁のことがあつたのに際して、京都に上

り、皇居を拜み、檀原神宮を拜して皇祖の偉業をしのんだりした。また湊川で楠公の墓に詣でては、

かしこしとぬかづくうちも我が袖のみなと川水せ
きぞかねつる

と詠んだ。

京阪の旅行において見聞遭遇した幾多の刺激経験によつて、彼女の勤王の精神はますます燃立つた。そして當時の福岡藩もまた勤王佐幕の兩派に分れて、互にその争が盛であつた。今や望東尼の平尾山の山莊は、決して風流の一隱宅ではなかつた。彼女は盛に當時の志士と交際し、彼等を激勵し、彼等のために山莊を貸して、或は密議所となし、宿泊所となして、隠然勤王の士の保護者たる地位をなすに至つたのは、實にこの京阪旅行後である。この後において、彼女の生涯はいろく波瀾曲折の中に入ると共

に、彼女の和歌はいよく熱烈な女丈夫の作たる面目を備へて來た。

僧月照が薩摩へ下つた時も、この山莊に宿つた。殊に平野國臣とは交深く、度々訪はれて多くの贈答をなした。或時國臣を宿して旅立たせた時に、國臣が、

忍びつゝ旅立ちそむる今宵とて山かげふかきやど
りをぞする

と歌つたのに和して、

ひとすぢにあかき道ゆく中やどにかしてうれしき
山のあれ庵

をしからぬ命ながかれ櫻ばな雲居に咲かん春を見
るべく

などと詠んで贈つた。

月照
京都清水寺の
住職。維新の
際西郷隆盛と
共に畫策する
ところが多か
つた。
平野國臣
福岡藩の志士
で國學の造詣
も深かつた。

月照と共にその山莊の客であつた高杉晋作の如きは、殊に親しかつた。

當時福岡の藩論は、佐幕派が優勢であつたので、望東尼がかくの如く勤王派のために盡くす態度は、大いに彼等の忌むところとなつて、元治元年、大獄を起して勤王黨に壓迫を加へた時、その餘波が望東尼に及んで、まづ座敷牢に幽閉の身となり、續いて彼女は玄海灘の孤島、姫島に島流しの身となつた時に、彼女は既に六十の高齡であつた。在ること二年、かの高杉晋作のために救はれることを得たが、この二年間の姫島幽閉は實に彼女の一生の最後の光輝ある一幕で、その苦しい牢獄すまひの間に、彼女の一生の作中のすぐれた歌の多くは作られたのである。當時の日記を「姫島日記」といつて、三部一巻をなしてゐる。歌文の筆端は、いづこにも血涙の跡をとゞめてをらぬのではない。

姫島といへば、陸路を去る五里の沖中にある一小島である。牢獄は四疊の荒板敷で、まはりには松の檻木を組み、荒格子を構へて、海に見える南の方にのみ小さな窓をあけてあるのである。いまだ流島されず、座敷牢に入れられてゐた時から、いよゝ、姫島に幽閉され、脱獄の時に至るまでの多くの作のうち、數首を左に抜出でてみる。

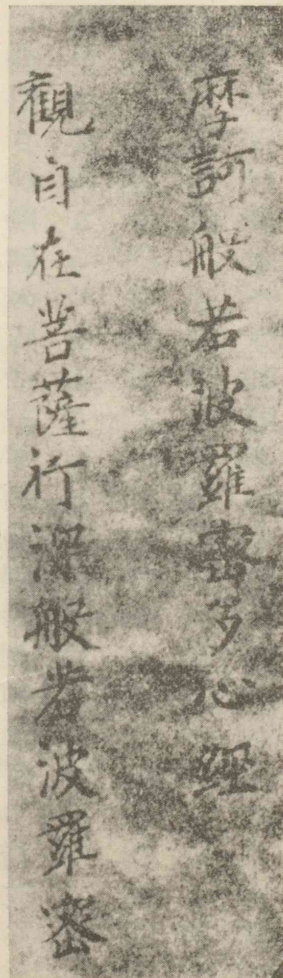
浮雲のかゝるもよしやものふの大和心の數に入りなば

一たびは野分の風のはらはずば清くはならじ秋のおほぞら

以上はまだ座敷牢にをつた時の作である。

住みそむるひとやの枕うちつけにさけばばかりの波の音かな

ともし火のあるにほこりて家にてはうとくも過ぎ
し冬の夜の月
流れこしうき身忘れてむかへてんいづこも御代の
春ぞと思へば



「經心若般」蹟筆尼東望

彼女はこの幽閉中同志の志士の處刑せられた報を聞き、悲し
みのあまり般若心經を血書して、その遺族に贈つた。その奥に記
した歌に、

おくれるてかくもかひなし法の文よみがへり來ん

つてならなくに

かくて高杉のために救はれて馬關に遁れたが、間もなく晋作
その人は病をえて歿した。望東尼は日夜看病に努めて、痛惜をも
つてこの同志の親友と永訣した。その後の彼女は、山口に移つて
同志の間に尊敬せられ、比較的安穩の生涯に入り、薩長の聯合の
軍が討幕に上るめでたい門出を祝つた。それから間もなく病を
えて病床に横たはつた。長州侯からは懇に取扱はれ、同志の士か
らは熱心に看護せられたが、終に起たず、六十二歳を期として、こ
の女丈夫の玉の緒は絶えた。吉田松陰の妹小田村氏の夫人も山
口から來て、彼女の最後の病床にあつた。時に慶應三年十一月六
日、明治維新の大業のまさに成らうとする時であつた。彼女の辭
世にいはいはく、

花浦の松の葉白くおく霜のきゆるもあはれ一さか

りかな

この美しい一首の調べは、この女丈夫も、その末期には、むしろやさしい女歌人たる彼女にかへつたことを語つてゐると思はれる。

彼女の功績は、歿後大いに認められるところとなり、明治の初年に至つて正五位に叙せられ、靖國神社に祭られた。また遺弟によつて平尾山莊には記念碑が建てられた。彼女の志士としての偉業は、今や殆ど十分表彰され盡くしたといつて差支へがない。しかも歌人としての彼女の面目は、いまだ十分に世に知られない憾がある。これ私が特に彼女を紹介した所以である。

中宮寺

法隆寺東院に接してあり、聖徳太子創建。今、眞言宗。繪殿・傳法堂・夢殿。法隆寺東院の一部。フエノロサ。アメリカの、明治十一年我が國に來て我が美術を研究した。

六 中宮寺の觀音

和辻 哲郎

屋根の低い繪殿の廊下を通りぬけて、その後方の傳法堂に行つた。そこにも多くの佛像が並んでゐるが、しかし、夢殿の祕佛を見たあとでは、殆ど目に入つて來ない。埃の多い床板の上を歩きながら、フエノロサの本の挿繪にある壞れた佛像の堆積を思ひ出して、本尊の裏手の廊下のやうな所へ踏みこんだ。壞れた像はまだ随分多く残つてゐた。殊に頭部や手などが埃のうちにごろごろころがらつてゐるのには、一種異様なおもしろさがあつた。その中から一つの美しい片腕を見つけて、私は友人を呼びに行つたりなどした。さうしておしまひに寺僧に叱られた。

そこを出て中宮寺へ行く。寺といふよりは庵室といつた方が似つかはしいやうな小ぢんまりとした建物で、また尼寺のやう

な優しい心持もどことなく感じられる。ちやうど本堂——といつても、離座敷のやうな感じのものであるが——の修繕中で、観音様は厨子から出して、庫裏の奥座敷に移座させてあつた。私たちは次の室に、御客様らしく座蒲團の上に坐つて、隔の襖をあけてもらつた。いかにも、御目にかさるといふ心地であつた。



中 宮 寺

的

懐かしい我が聖女は、六疊間の中央に腰掛を置いて、靜かに腰掛けてゐる。あの肌の黒い艶は、實に不思議である。ねばり強いやうな木とは思へぬ流動的な感じで、微細な面の凹凸を實に鋭敏に生じてゐる。殊に顔の

表情の細かさ柔らかさは、微妙な肉づけの注意が、この黒い艶の助をかりて、始めて完全に現れ得たものと思はれる。あのうつとりと閉ぢた眼に、しみくと優しい愛の涙が、實際に光つてゐる



中 宮 寺 の 観 音

やうに見え、あの微かにほゝゑんだ唇のあたり、この瞬間に閃いて出た愛の表情が、實際に動いて感じられるのは、確かにあの艶のお蔭であらう。あの頬の優しい美

しさも、その頬に指先をつけた手の、いひやうもない形のよさも、腕から肩の清らかな柔らかかみも、あの艶を除いては考へられない。だから、光線を固定させ、或は殺し、或は誇大する寫眞には、この

像の面影は傳へられないのである。

私たちはたゞうつとりとして眺めた。心の奥ではしめやかに、靜かに、とめどもなく涙が流れた。そこには慈悲と悲哀との盃がなみ／＼と充たされ、それを嬉しく悲しく飲干す心があつた。まことに至純な美しさで、また美しいとのみではいひ盡くせない神聖な美しさである。

私は聖女と呼んだ。観音といふ言葉よりも、その方がふさはしい。しかし、これは聖母ではない。母であると共に處女であるマリアの美しさには、母の慈愛と處女の清らかさとの結合が「女」を淨化し透明にした趣があるが、しかし、我が聖女は慈悲の權化である。人間心奥の慈悲の願望が、その求めるところを人間の形に結晶せしめたものである。

私の知識の乏しさは、却つて容易に結論をつかませる。凡そ愛

の表現として、この像は世界の藝術の中に比類のない獨得なものではないか。これよりも力強いもの、威嚴のあるもの、味はひの深いもの、或は烈しい陶醉を表すもの——それは世界に稀でもあるまい。しかし、この純粹な愛と悲しみとの標號は、その曇のない専念のゆゑに、その徹底した柔らかさのゆゑに、恐らく唯一な味はひをもつ。その甘美な、牧歌的な、哀愁のしみとほつた心持が、もし當時の日本人の心情を反映するならば、この像はまた日本的特質の表現である。古くは「古事記」の歌から、新しくは歌舞伎・淨瑠璃の文學まで、もののはれと、しめやかな愛情とを核心とする日本人の藝術は、既にこゝにその最も優れた、最も明らかな代表者をもつてゐるのである。浮世繪の人を酔はしめる柔らかさ、日本音曲の心をとろかす悲哀も、その根強い中心の動向は、あの觀音に表された願望の一つの流に過ぎなからう。法然親鸞の宗

法然
淨土宗の開祖。
親鸞
眞宗の開祖。

上宮太子
聖德太子をい
ふ。

教も、柔弱といはれる平安時代の小説も、あの願望と、それから流
れ出る優しい心情とを基調としないものはない。
あの悲しく貴い半跏の観音像は、かく見れば、我々の文化の出
発点である。古事記の歌も、時代からいつてこの像よりさほど古
くはない。勿論現在の形に書きつけられたのは、百年近く後であ
る。上宮太子の文化が凝つてこの像となつたとすれば、この像は
上宮太子その人の深いしめやかな慈愛を示すものである。日本
最初の成文法である太子の憲法が極度に人道的であるのも、ま
た偶然ではないが、これ等の最初の事象を生みだすに至つた母
胎は、我が國の優しい自然であらう。愛らしい、親しみ易い、優雅な、
そのくせ、いづこの自然とも同じく底知れぬ神祕をもつた我が
島國の自然は、人間の姿に表せば、あの観音となる外はない。
自然に酔ふ甘美な心持は、日本文化に貫通して流れる著しい

特長であるが、その根は、あの観音と共通に、畢竟我が國土の自然
自身から出てゐるのである。葉末の露の美しさをも鋭く感受す
る繊細な自然の愛や、一笠一杖に身を託して、自然に融入つてゆ
くしめやかな自然との抱擁や、その分化した官能の陶醉、剽逸な
心の法悦は、一見この観音と甚だしく異なるやうに思へる。しか
し、その異なるのは、たゞ注意の方向の相違で、捕へるところの對
象にこそ差別はあれ、捕へにかゝる心情には、極めて近く相似た
ものがある。母であるこの大地の特殊な美しさは、その胎より出
た子孫に同じ美しさを賦與した。我が國文化の考察は、結局我が
國自然の考察に歸つてゆかなくてはならぬ。

七 檀園文抄

中島廣足

一 落葉

ふりかくしてしなどうち誦せらるゝものから、ことさらに踏
 分くる人もやと、手づからは、きとりて、門のあたり少しかきは
 きなどするに、またも吹きくる嵐にうち散りまがふが、かたへよ
 り積りゆけば、は、きもふようにて、簀子にしりかけつゝ、見わた
 るほど、やう／＼暮近くなりてねに行くからすどものみだれあ
 ふ木の葉に飛びまがひたるは、かの夕日はなやかに、といひし秋
 よりもいま一きは身にしみてあはれなるに、風いと寒くなれば、
 引きたててうちに入りぬ、なほ吹きまどはす木の葉のはら／＼
 とさうじに散りかゝりたる、時雨さへそふ心地していとをかし
 く。

「踏みわけて
 さらみや訪は
 んもみち葉の
 ふりかくして
 し道と見なが
 ら詠人不知
 五所載」
 古今集 卷

夕日はなやか
 に
 「枕草子」に見
 える。

二 夜學

寺々の初夜の鐘の響もをさまりて、皆人も寝たるにいとうれ
 しう、燈火あかくしなして、ふづくゑにうちむかひたる、いみじう
 心すみて、晝見たりしあたりの、何心なくて過ぎにしも思ひ知ら
 れて、深き心ばへあるくたり／＼も、おのづからとき得らるか
 か、げつくしても、なほねぶたさも知らず、油さしそへつゝ、見も
 てゆくに、遠き世の人もたゞさしむかひ語らふ心地す、冊子つく
 りて、をかしきふし／＼、あるはふと思ひ得たることなどをば墨
 おしすりつゝ、書きつけなどするもをかし、鳥の聲は夜深きにや
 と思ふに、いとくあけはなれたる、しばしとてうち眠る夢のう
 ちも、あだしごとならんやは。

三 杜

くれゆく野末に、いと木ぐらう見えたる一むらは、神のみやし

いと寒きに云
云
「枕草子」に見
える。

ろにやと思ふに、木の間にほのめく火のひかり、しめ引きはへた
るみづがきのさまなど、たどくしきものから、いとかうくし
く見えわたるに、畦の細道たどり行きて、鳥居のもとに到れば、奥
の方より年老いたる翁の、腰かままりたるが、とうろ引きさげて
出できたるは、御前のことどもものせしなるべし。近くあゆみよ
りて、いかなる神におはしますにか。と問へば、八幡の宮になん。と
こたふ。また神づかさの名を問ふに、しかん。とこたふるは、はや
う聞知れる人なりけり。さはこの杜なりけりと思ふもうれしく。

四 埋 火

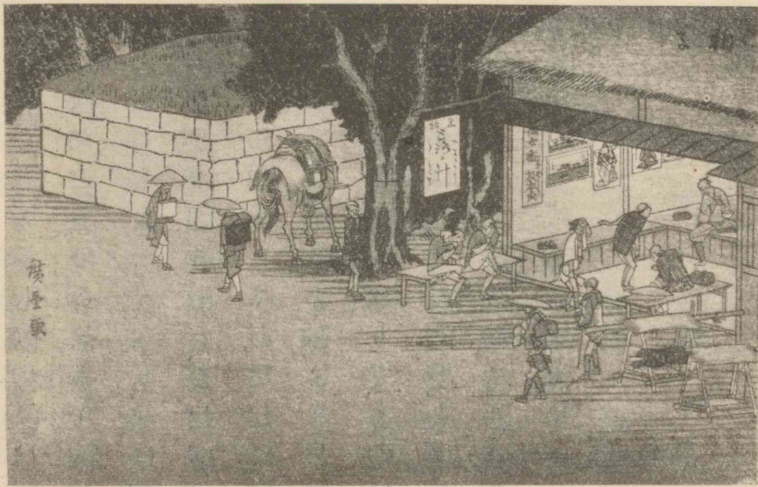
いと寒きに火などいそぎおこして、炭もて渡るもいとつきづ
きし。と少納言の筆すさびにも、のせられたる、げにさることにて、
冬はたゞこれのみぞまらうどのあるじまうけにもなりぬめり。
雪降りつもりたる日、かねてちぎりしをとふに、思ひしごとくに

南面清くはらひて、簾高く捲きあげたり。大きやかなる火桶のよ
きほどにうづめる火に、やがてさし向かひたる心地いみじうう
れしく、いたり深き主人の心も思ひ知られぬ。かくて何くれの物
語するほど、なほ炭を。とて取出でたる、手づからさしそふるもを
かしきになほ大きやかなる齒固など取出して、やがて、これにて
焼きてこそは。といふに、雪のさむけさもかつく、忘られてなん。

五 漁 村

あまのすみかばかりあはれなるものはなし。いとたよりなき
海邊の、風もたまらぬ松かげなどに、たゞかりそめに作りたる藁
屋どものさま、浪うち寄せなばやがて流れも失せぬべう、いとほ
かなげに見ゆるを、繪にかきすさびたるなどは、なかくにをか
しきものから、さてすまひなば何心地かせましと、思ひやるだに
心ぼそし。夕つ方など、年老いたるをのこの、手がらみしたるが磯

邊に立ちて、けふはいと遅くもあるかな。などといひつゝ、沖の方
 をまぼりをり。うまごどもにやあらん、眞砂の上を走りありきつ
 つ遊びあたるに、入日さしたる島かげより、三つ二つ歸りくる船
 の、かぢ引きをりてほこらしげなるを、老人待ち得顔にうちほ
 るみたるは、さち多かりしにやと見ゆ。渚に寄せてとびおるゝま
 まに、綱くりよせなど、とかくしつゝのゝしるに、男も女もあまた
 出で来て、大きな籠に魚ども取入れつゝ、になひもて行くさま
 さはいへど、賑ははしげなり。くゞつめくものもて来て、ちひさき
 魚三つ四つこひもて行く童などもあり。すべて人多くたちこみ
 さわぎて、船のあたりかしがましく、さし寄りてのぞくべうもあ
 らず。いと長き網の渚にかけほしたるを、くりためて取入れなど、
 やう／＼静まりゆけば、こなたかなた火ともしたるすき影、壁も
 あらはにて、いとあはれに見ゆ。ひと夜宿りて見れば、波風の響枕



(筆重廣齋立一) ぢやまう

をゆすりて、つゆまどろまれず。
 曉方、隣の家々目さまして、なり
 はひのことどもなるべし、あや
 しう聞知らぬことどもを、おの
 がじし聲高にいひかはしたる、
 げにあまのさへづり、めづらし
 うも、をかしうも。
 六 うまやぢ
 をさまれる世は驛路のゆき
 かひも賑ははしく、人やどす家
 はた建てつゞけて、草ひき結ぶ
 思もなきものから、さすがにう
 ちとけてしも寝られぬは、旅路

のならひなるべし。曉の鐘はいづこも同じ響にて、いととく立出
づるはたご馬のこゑと、枕がみに聞えて、心地よげなるに、けふ
は、ていけもよかんなり。なにがしの浦の眺いかにをかしからま
し。かしこの御社にも、こたびこそは。などいひつゝ、さゝやく音の
ほのかに聞ゆるは、あなたに寝たる旅人なるべし。家なる人々も
起出でて、朝げのことなどとかくまかなひありくほど、やう／＼
ものさわがしくなりて、ものになひゆく男どもの、鄙唄うたふな
どいそがはしげに聞ゆ。とばかりありて、門のもとにひきよせつ
つ「馬まゐりてさぶらふ」といふは、わが乗るべきにやと思ふも、い
とをかし。

八 心の落葉

一 理智と情操

九條 武子

日本婦人の最も讚美すべき特徴は、豊かに恵まれたその情操
である。そして日本婦人に最も望ましいものは理智である。

理智の光のない愛は盲目に終る。理智の燈炬を高くかざして、
始めて盲愛の闇路より出づることが出来る。しかし理智のみの
生活は、たとひ愛を解しても、みづから愛に充たされることは出
来ない。

我等の愛は、理智の導きによつて、正しい成長を求めなければ
ならない。そしてこれを永く撫育してゆくものは、おのづからに
して鍛へ上げられた情操に他ならない。理智に明らかにして、し
かも濃やかな情操を保持するところに、よき均衡と、調和された

豊かな生活が展かれる。

二 ひざまづく心

神のすがたに對し、たゞしは山に對し、高空の陽に對しても、心からひざまづく心に何のいつはりもない。その對象のどういふものであるにせよ、全我を捧げてひざまづき得る心の感激をもつものは幸福である。

美しい信の世界には、懷疑もなければ恐怖もない。あらゆる虚飾から放たれた合掌の姿は、また感激の姿そのものである。感謝される心持は、信ずるもののみが知る法悦の世界である。

何人もいつはりのない世界に住みたいと思ふ。いつはりの多い世の中であるだけ、信じあふ世界にあこがれる。しかも、共に信じあふ世界は、人々が互の合掌される感謝の心持によつて、始めて成されるのである。

三 眠に入る時



その日の仕事を終へて、眠に就かうとする時、靜かに一日中の

自分を回想してみる。一日の營みに疲れた自分を、もう一度呼返してみる。それは

九 涙ぐましいほど懐かしいものである。

何の思ひわづらふこともなく眠に就

く時は嬉しい。快い回想のうちにも、とも

すれば暗い影にをのゝく自分を見出す

子 時は、限ない寂しさに襲はれずにはをら

れない。

自分をしみつゝと、とかへりみることは、

つゝましく生きる合掌である。私たちは、絶えざる懺悔をとほして、丹念に生活してゆきたい。そして何の憂もなく平安な眠に入

りたいと思ふ。

四 率直

言葉によつて盡くし得ないことを、行爲をもつて補はうとするのは、正しいことではない。近代人は、互の本心に觸れあひ、互に了解するところまで到らずして、直ちに行爲を用ひようとする。あまりに行爲を弄ぶところに、近代人の悔と悩みとがあるのではあるまいか。

何人も率直に自己を示す時は、無用の行爲はすべて跡を絶つことであらう。しかし多くの人は、堪難き苦惱を忍んでまでも、一時の體面と、小さな意地とを満足させようとする。本心に觸れない寂しさをもちながら、なほ醜き體面を守らうとするのは、懺悔の心に缺けてゐるからである。

九 もう一つの鏡

太田正孝

人はパンのみで生きるものではない。しかもパンなくして生きるものでない。人のこの世にあるのは、美しい生を遂げるためである。孔子のいはゆる道を知るにある。人生は、かうあるべきといふ悟を開いて死ぬことである。お金ばかり貯めることではない。お金ばかり貯めても、その心がさびしくては、何にもならないからである。しかし貧乏してゐては、人の世の道を知る暇もなく、道を知ることすら出来ない。だからお互の經濟活動が必要になつて來るのである。言葉を換へていへば、衣食足るといふ物質文明が進むと共に、禮節を知るといふ精神文明が向上しなければならぬ。然るに、我が國においては、この物質方面即ち經濟に就いての知識が、とりわけ婦人に對してゆるがせにせられて來たこと

福澤諭吉
教育家である
と同時に、社
會の改良に盡
くすところ
多かつた人
舊、前中津藩
士、明治三十
四年歿

は、返すくも嘆かほしい次第である。

この點に就いて、早くより我が國の婦人に目ざめよとばかりに警鐘を打つたのは、福澤諭吉翁であつた。顧みれば、明治三十一年九月二十六日、翁が腦症をわづらつて、醫師も匙を投げようとした時であつた。最期も迫つたではないかと氣づかされた時、半ば眠つてゐるやうに見えるうちにも、何やら呟くやうに見えたので、枕邊にゐた人たちは耳を澄まして聽くと、平素主張されてゐる女道論の一節であつた。いかにも驚くべきことではないか。幸にして翁の病氣も恢復し、翌三十二年二月、世に公けにしたのが、有名な「女大學評論」と「新女大學」である。それは、新興日本の婦人のために、その進むべき道を示されたのである。そのうちに、經濟に就いて、かう書かれてゐる。

「殊に我が輩が日本女子に限りて、ぜひとその知識を開發

せんと欲するところは、社會上の經濟思想と法律思想と、この二者に在り。女子に經濟法律とは甚だ異なるが如くなれども、その思想の皆無なるこそ女子社會の無力なる原因中の大原因なれば、何はさておき、普通の學識を得たる上は、同時に經濟法律の大意を知らしむること、最も必要なるべし。これを形容すれば、文明女子の懷劍といふも可なり。」

まことによくいひ當てた言葉である。そして翁は、今まで婦人に對して説かれた經濟の知識が消費方面にのみ限られ、いはゆるしまつをよくするといふ方面にのみそゝがれてゐたのを、收入の方面にも及ばねばならぬと説いたのである。人の生はもに限があり、夫とても百歳の生命は保ち難い。さなくてさへ、妻の方が夫よりも年の少いのが普通の例であるから、死別れでもする時は、残された子供を抱いて泣き、時には財産のことから訴訟沙

汰にも及ぶことさへあるからである。これ一に生前、夫の仕事や財産や収入のことを知らなかつたといふことにあるから、さういふ方面のことも知つておかねばならぬと、嚙んで含めるやうに説いてゐる。しかし私から申せば、婦人に要求する經濟知識は、かういふ個人經濟のことのみでなく、國や市町村の財政のこと、も、あらましは知つてゐるべきであらうと思ふ。何となれば、かやうな財政は、主として互國民の税によつて支へられてゐるものであり、その税のうちにも、特に婦人の手を通して臺所から納められるともいふべき織物消費税や酒税などの間接税といはれるものが少くないからである。なほ進んでは、お互は向ふ三軒兩隣から成る社會に、特に國のうちにあつて經濟を立ててゐるといふことも知らねばならぬ。いはゆる國民經濟に就いての知識である。否、さうするのでなければ、本當にしまつをすることも

出來ず、生活を豊かにすることも出來ない。

ラスキン
十九世紀のイギリスの文藝美術批評家

おもふに、これまで女のために説かれたものは、女の心を磨くことが主眼であつた。婦徳を磨くことであつた。ラスキンは女道を説いて、女の鏡——それは朝よく見られよ。そして髪の毛一つ亂してはいけない。しかし一度見たならば、一日中見なくてもよいやうにせよ。そして一日中、心を清くしてゐなければならぬ。といつてゐる。女の鏡は、女の心を寫すものである。婦徳を映すものである。精神の鏡である。もとよりそれは大切なことであるが、私は物の鏡、經濟の鏡も知らねばならぬと信ずる。禮節の鏡である。道徳のことは曲りなりにも説かれてゐるに、かはらず、物質の鏡ともいふべき。もう一つの經濟の鏡を磨くことがなほざりにされ、福澤翁の心配したやうになつてゐることは、残念至極である。

デビッドソン
十九世紀後半
から二十世紀
初頭にかけ
てのイギリス
の詩人

〔禁轉載〕

かくいへばとて、私は婦人が何事も男子の如くになれといふ
のではない。たゞ女として完成するためには経済知識が必要で
あるといふのに過ぎない。かつて成人教育のために力を盡くし
たデビッドソンは、すべて優秀なものは、たゞ一種よりないので
はない。完全な婦人は、完全な男子とちがつてゐなければならぬ。
存在の大なる喜は多様から湧くのである。一樣は貧弱で單調で
平凡である。といつてゐる。これは、妻として内助の立場におかれ
た時と、獨立の婦人として暮す場合とを問はない。常に女らしい
女であらねばならぬ。

犬塚番作
足利持氏の
習子。犬塚
の持子。匠
の持子。近
習子。匠の
持子。近
習子。匠の
持子。近
習子。匠の
持子。近

寛正

後花園天皇の
御代。足利義
隆の治世。

一〇 信乃の生立

瀧澤馬琴



瀧澤馬琴

犬塚番作が年來の志願漸く遂げて、寛正元年秋七月戊戌の日
に男子出生し、母も子もいとすくよかに産室をさむる頃になり
ぬ。さて兒の名を何とか呼ばん。と
女房手束に語らへば、手束は暫く
うち案じ、よに子育てのなきもの
は、男兒ならば女の子とし、女の兒
には男名つけて養ひ育つれば恙
なしとて、しかする人も稀にはは
べり。我が夫婦に幸なくて、男兒三人擧げしかど、皆みづ子にな
くなりたるに、この度もまた男兒なれば、一しほ心弱くなりて、想
ひやりのみせられはべり。この子が十五にならん頃まで、女の子

墓六
龜篠の夫。
龜篠
番作の妹。

にして育てば、恙あらじと思ひはべり。その心して名づけ給へ。」といへば、番作うちほゝゑみ、死生命あり、名の咎あらんや。物忌多き世の僻事いと信け難き筋なれども、御身が心やりにもならば、世に従ふもわるきにあらず。古語に長きを「しの」といふ。我が子の命長かれと、壽の心もて、その名を信乃と名づくべし。」と。これより手束は信乃が衣裳を女服にせざるはなく、三四歳の頃に及びて、いたゞき髪おくほどにもなれば、櫛ささせ簪ささせて、信乃よ、信乃よ。」と呼びしかば、知らざるものは、この兒を女の子ならんと思ひけり。

されば墓六、龜篠は、このていたらくを見聞くごとに、掌拍ちて冷笑ひ、凡そ人の親たるもの、男兒を擧ぐるを面目とせざるはなし。然るに武士の浪人が、女の子を願ふはいかにぞや。結城合戦に逃げおくれ、背疵受けしにいたく懲りて、軍といふもの夢にも見

練馬
東京市の西郊
當時練馬平
左衛門の所領

せじと思ひて、かくまで戯氣をつくすか、思ひしにます痴者なり。」とさかしらだちて譏れども、相鎚はやすものはなく、なか／＼に里人等は、信乃を愛して物をとらせ、かたみ代りに抱きとりて、その母の手を助けしかば、墓六夫婦はいとどしく、妬きこと限なし。また羨ましく思へども、龜篠四十に餘るまで、子供一人もなかりしかば、夫婦しきりに談合して、ひたすら養女を索むるに、それが媒約するものありて、練馬の家臣某といふものの女兒、今年僅かに二歳になるを、生涯不通の約束にて養ひとり、濱路と名づけて、分に過ぎたる綺羅を飾らせ、やゝ東西を知る頃より、絲竹の技に師を擇みて、萬づあだに養ひたつるに、生まれ得たる顔ばせの、人なみなみに立ちまされば、鳶の子に鷹ありとて、女兒を譽むる陰言を、聞く二親はほゝゑみて、われを嘲るよしを曉らず、位高く富み榮えて、世に威徳ある婿ならで、えこそは取らじと誇りけり。

瀧の川
東京市の北郊、
瀧野川町。

番作が一子信乃は、はや九歳になりしかば、骨逞しく膂力あり、げに尋常なる人の子が、年十一二になるものより、身の丈ひとかさ高かるに、なほ女服着せられて、雀小弓に紙鳶、印地打竹馬など、萬づの遊も荒々しきまで、おのづから武藝を好めば、番作ますます鍾愛して、朝には里の總角と共に手習させ、夕べには儒書軍記の句讀を授け、また或時は試みに劍術拳法を教ふるにも、とり好む道なれば、その技の進むこと、親すらしばしば舌をふるひて、末たのもしく思ひけり。さても信乃が生まるゝ頃、母親手束が瀧の川なる、岩屋詣の歸るさに、將て來つる狗の子は、信乃と共に大きくなりて、今年は既に十歳なり。この狗背は墨よりも黒く、腹と四足とは雪より白ければ、その名をやがて四白とも、また與四郎とも喚ぶほどに、年比信乃によく狎れて、うちたゝかれても怒ることなく、手に屬き、その意に隨ふにぞ、信乃は與四郎に索たづ

約音
足搔
イロニヤカ

なをかけてうち乗れば、犬は主のこゝろを得て、足搔を早めて幾返りかす。この童子が、いたらく平人にはあらじとて、賞嘆するも多かりけり。

さるほどに、今年秋の頃よりして、手束は心地例ならず、病の床に臥ししより、鍼灸薬餌の驗なく、冬の初に至りては、日に弱るばかりなれば、番作はいとどしく、眉うち開くよしもなく、夜とて安くはまどろまず。信乃はまた朝な夕な、醫師がり往來しつ、薬を進め腰をさすり、四方八方の物語して、母の徒然を慰むるに、思はず涙目に盈ちて、やるかたなきを見る母は、胸ふたがりて泣顔を隠すよしなく、鳩尾を撫でてつかへにまぎらかす。親子かたみに思ふこと、いはねどしるき孝行慈愛、心ぞ想ひやられたる。

かくてそのあけの朝、信乃は薬とりにとて、いそしく出で行きしが、冬の日なれば短くて、はや巳の頃になりしかど、常にもあら

で信乃は歸らず。彼路草をくふものにあらず、いかにしつらんと、子を思ふ親の心はおちつかず。番作は外面へ出でて見んとて障子を開けば、思ひがけなく縁側に、薬のかよひ箱はあり。こはいぶかしと紐ときて、蓋かいたれば、薬もあり。さもこそと片頬に笑みつゝ、件の箱を携へて、いそがしく裡面に入り、手束よ、薬はかしこにあり。いつのほどにか信乃は還りて、氣鬱を晴しに出でにけん、まことに童ごころぞかし。いかばかりおもしろきもの見かけてか、還りたる由をも告げず、また出でたり。といふに、手束は稍おちゐて、たま／＼のことなるに、必ずな叱り給ひそ。還るに程ははべらじ。といひつゝ、もその顔見ねば、片心にぞかゝりける。かくてはや、未のあゆみ過ぎにけん、日かげ斜になる頃まで、待てども／＼信乃は還らず。よしや遊に耽れりとも、餓ゑなば興も盡くべきに、ものをも食はでいづこにをる。心得難きことなり。と、父すらいへ

巢鴨
東京市の北郊、
巢鴨町。

不動の瀧
瀧野川成就院
の境内にある。

ば母はなほ、重き枕を幾たびか、擧げて眺むる外面に、板金剛の音すれば、それかとぞ思ひだまされて、人の足さへ恨みけり。妻がかこてば、番作も、立つてみ、ゐてみ、待ちわびて、思はずも嘆息し、我が足むかしの如くならば、たゞ一走りに走りめぐりて、必ず尋ねて將て還らんに、日影短き小六月、夕日を見つゝ、杖にすがりて、いづちまで行かるべき。さりとして暮れなばいよ／＼、便なし。巢鴨までも。と一腰を挿して、竹杖つき、試み、外面に出でんとす。かゝるところに、番作が、背戸の向ひなる百姓に、糠助と呼ばるるもの、右手に一筋の釣竿と、一つの魚籠とを携へて、左手に信乃を扶け引き、せはしく詣來つゝ、番作と面をあはして、呵々とうち笑ひ、犬塚氏か、秋の稼ぎもしはてたる、骨休めに我と我が、一日の暇を賜はり、今日は未明に浮かれ出でて、神宮川に雑魚釣暮し、瀧の川を歸り來れば、こゝなる息子が不動の瀧に、水垢離執りて身

は冷徹り、息も絶ゆべき有様を見つけし時は、膽潰れて、あわてふためき引出し、そがまゝ坊へ將て行きつ、藁火にあたゝめ薬を飲ませ、法師等もろ共に勞ること半時ばかり、始めて我に復りしかば、湯飯もらうて腹を肥させ、事の故を尋ねれば、母の大病平癒の祈禱に、水垢離を執りしといふ。十にも足らぬ童には、類稀なる大孝行法師等も感心せられて、求めざれども、當病平癒の神符洗米を賜はりぬ。件の瀧は寺へ遠くて、我が外に人知らざりき。まことに危きことなりし。かくまで賢しき子なり、親なり、佛神見放ち給はんや。母御は本復疑なし。いざ子實を受取り給へ。暮れかゝればはや罷るなり。病む人によく心得てよ。要あらば背戸口から、竹螺鳴らして呼び給へ。わ子よ、明日は遊びに來よ。この魚炙りてはません。と、おのがいふこといひ誇り、人の挨拶聞きはてず、裡面にも入らで還りけり。

さてはとばかり番作は、我が子をほとり近く侍らし、信乃よくものを心得よ。身を危めて怪我あらば、親の嘆きはいかなるべき。かくては孝が不孝ぞかし。親いとほしと思ふ子のためには、祈らでも神は守り給はん。と、諭せば、信乃は涙ぐみ、宣ふところ心得はべり。今朝醫師がり赴きて、薬賜はりて還りし折、家尊に、家母のものたり。信乃が命の長かれと、勿體なくも我が母は、命をにへに神々へ、祈らせ給ひし験にや、長きいたづきに臥し給ふと、宣はせしを立聞きて、涙にぬるゝ片袖を、泣聲立てじとかみしめて、縁側についゐたりしが、親の願望驗あらば、我が願望も驗ありなん。いかでこの身をにへにして、母の命に代らんと、思ひ定めつ。年比母の信じ給ふ瀧の川に走り行き、岩屋の神に思ふこと、繰返したる瀧の絲、心強くも身をうたせ、一度は死にはべりけん、その後のこと知らずはべり。さてあるべきにゆくりなく、糠助男に妨せられ

て、生きて還るは願望を、神は受けさせ給はぬにや、いと口惜しく
悲しくはべり。」といひかけて目を押拭へば、手束はよゝと泣沈み、
「世に子をもたぬ親はなけれど、今日死するとも我が身ばかり、幸
あるものはなきぞとよ。八九歳のをさな心に、賢しや親に代らん
と、祈る誠を神明の、受け給へばこそ瀧壺の、水屑とならで還りけ
め、かくまで命運強き、我が子の上を見るからに、行末さへにたの
もしく、歡ばしさに涙のみ、はふれ落ちてとゞめ難し。母が身に代
らんとて、祈りしは惑なり、驗あるべきことならぬに、返すくも
よしもなき、願立なし給ひそ。」と、涙の隙に諭しけり。

二 朝日の前

あはれ、日の出、
山々は酔へる如く、
みな喜に身をゆすりて、
黄金と朱の笑まひを交し、
海といふ海はみな、
虹よりもまばゆき
黄金と五彩の橋を浮かべて、
「日よ、まづ
こゝより過ぎたまへ。」とさし招き、
さて、日の前にぬかづかんとす。

與謝野晶子
現代十篇

あはれ、日の出
萬象は
一瞬にして、奇蹟の如く
すべて變れり。
大寺の屋根に
鳩のむれは羽ばたき、
裏街に眠りし
運河のどす黒き水にも
銀と珊瑚のゆるき波を揚げて、
早くも動く船あり。
人、いづこにか

靜かに怠りて在り得べき。
あはれ、日の出
神々しき日の出、
われもまた
かの喬木の如く
光明赫灼のなかに、
高く二つの手を開きて、
新しき日を抱かまし。

一二 冬の追想

三木露風

冬になつて紅葉も既に凋落し、時雨がさら／＼と降つて来る。さうして、落葉した林に淋しい姿を見せて、朽葉の色を深める。遠くから風に吹かれて降つて来て、また反対の方へとだん／＼音が微かになつてゆく。あたかも空中の波のやうに時雨は揺れつゝ降る。夜は殊に時雨の音を聴いてゐると、情趣のあるものである。時雨は淋しいが懐かしい感じがする。書を読む眼をそらして、耳を傾ける。心を時雨にまかせるやうにして、遠くなり近くなるさゝやかな響を追ふ。郊外の我が家の近くには林がある。この林の外で時々人が晝を描いてゐたり、焚火をしてゐたりする。芥や落葉を掃集めて、手拭をかぶつた女が、箒片手に燃えゆく火を見詰めてゐる。枯葉の燃える匂がして、青い煙が風のまに／＼横に

這うて、また上へのぼつてゆく。そこへ、折しも時雨が降つて来て、

煙の中へ落ちる。冬の趣に時雨がないならば淋しく思ふ。

霜柱が立つやうになり、北の空に灰色の雲が見えるやうになると、北の國に雪の降つた噂などをする。さうして、北海道の雪の旅を私は追想する。

橇こまが雪の上を走つて行く。りん／＼と鈴の音を鳴らして、その影は雪の降るためにおぼろになる。それを見送つてゐると、北國人の生活といふことが思はれる。北國人にとつては、橇は冬の生活に大事なものである。雪が四五尺も積つてゐると、容易に歩行し難い。橇に乗つ



橇

て行くと、すべるやうに早く行くことが出来る。北海道では大概馬が曳いてゐるが、樺太では犬が曳く。橇に乗つてゐると愉快なものである。遠くの蒼緑をした杉の林などを眺めながら、雪の中を行く。向ふからも橇に乗つて来る者があつて、鈴を鳴らす。さうして、聲をかけあつて挨拶をする。

小學生は冬になると通學が困難である。殊に吹雪の日になると、幼い子供は全く歩けなくなつてしまふ。その時村では、大きな橇に子供を一ぱい乗せて、大人が同乗して馬を驅けらせる。子供は元氣に聲を揚げる。馬は駈ける。さうして、勇ましい鈴の音がする。

北海道の鐵道各驛には、冬になると大抵赤い札に「風雪」と書いてあるのが出されてゐる。その赤札に北海道氣分が濃厚に出てゐるやうに思はれる。汽車の窓から眺めると、落葉松やとゞ松に

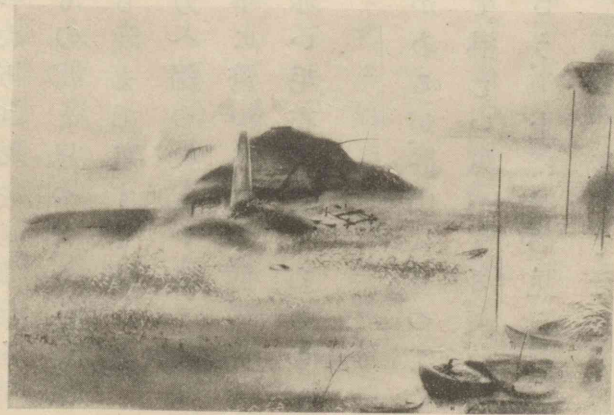
雪の積つてゐる景色が續いてゐる。また雪の曠原の中にぼつりとたゞ一つ小屋のやうな民家があつたりする。その孤影を見て私は、あんな所でよく生活が出来るものだと思つた。さういふ所に住んでゐる者は、熊狩をして朝から晩まで暮すと聞いた。

また、熊が牧場の牛を負うて山の方へ歸つたといふことも聞いた。牛を負うて行く熊の力の強い事に驚かされる。熊の皮を買ふ商人が村を歩いてゐるのを見た。赤い毛布を着てゐるのが、いかにも皮買商人の感じがした。

私はまた越後の海岸にゐたことがあるが、砂山に立つて佐渡が島を望むと、日本海に荒波が立つて淋しい氣がする。灰色の雲が低く垂れて、今にも雪が降りだしさう。海上に船の見えない日は、一層侘しい眺である。砂山を下りて海岸を歩いて行くと、鹽焼く煙が見える。釜のある小屋には誰もをらずに、たゞ煙のみが立

つてゐる。海から吹く風が苦屋を吹いて、簷戸をはたくと動かし、湿った潮の氣を吹きつける。子供が二三人、つゞれを着て草履をはき、村の方から砂濱を歩いて来る。そして流木を拾ふけれども、子供のことであるから、濱に引上げられた小舟の傍で、何か話しながら遊ぶ。干した網に風が吹いて動く。砂山の向ふに村の藁屋根が半分ほど見えて、鳥が寒さうに飛んでゐる。

行くうちに、また向ふに砂山が二つも三つもある。私はそれに上つて、海の白波を見る。さうして、鞆なまふと寄せて来る波が渚に碎けるの



(筆 磯 月 田 濱) 屋 鹽

を興味深く思ふ。ずっと遠くの汀にも白波が寄つて、その音が微かにこちらへ傳はつて来る。遠くの丘には枯草が靡いてゐる。そこは防波堤である。北海の濱邊は、一里行つても二里行つても變らぬ趣がある。

私はまた或溪谷に近い山莊で冬を越したことがある。小鳥が朝ごとに來て鳴いた。さわやかな聲で、透きとほるやうな空氣を響かせて鳴いた。谷川のほとりに立つと、落葉しきらない梢から一枚二枚の朽葉が、微かな音をたててはら／＼と落ちて来る。見上げる冬の空は青い。

谷川には落葉が流れ寄つてかたまつてゐるために、水の通りが悪くなつてゐる。ところ／＼石が飛出て、冷たい飛沫が上つてゐる。夏の日に山蟹が匍ふのを見たが、冬の谷では見ない。山の木からつりさがつてゐた赤い烏瓜も、零餘子も、今は枯れはてて、僅

かに朽ちた蔓がまつはるのを見るばかりである。

山莊の夜は殊の外冷える。月が山の端に出て、樹立の暗い影と共に縁側から眺めるのは淋しい。都會で見る月、海で見る月といろいろ冬の月もあるが、山莊で見ると月は最も淋しい感じがする。樹の間の道は、夜になれば一人通らぬ。寂寞として風のない時は、一層しんとして冬の威厳ともいふべきものを感じしめる。しかし、私は獨り山の路を月を見つゝ、逍遙するのが好きであつた。下の方には、野と村とが、微かな光の中に横たはつてゐる。人が皆寢静まつた夜に月は、冴えわたつて、天體の運行はその推移をやめない。星座の幽玄神秘なことを最も感じさすものは冬の夜の空であらう。

雪の降る日には、裏の竹林にさゝやかな音をたててゐるかと思ふと、もうそのさらさらといふ音がしなくなる。やんだのかと

思つて障子を開けて見る。雪が竹の笹の葉に積つてゐるために、もはや葉に直接觸れる音がしなくなつたのである。さうして音のないのが却つて積るので、夜が明けて見ると、竹は重さうに雪をかぶつて垂れてゐる。どの竹も皆頭を下げて、そのうちの一二本は重みに堪へないで、夜のうちに折れた。

雪の日に、谷の石が白くなつてゐる。さうして、岩間の水が白雪に對して碧色に冷たく光つてゐるのは、畫趣がある。そこへ、小鳥が來てゐるのを見ることがある。雪の晴れた朝、いつもよりは青い空に、鳶がのんびりと舞うてゐるのを見ると、小春日に似た温かな氣持になる。山莊で冬にも色變へぬ樹は、松や高野槇である。夏の時盛であつた白百合は、その莖が赭色に枯れて、佗しく立つてゐる。それを見るのは淋しい。山から見る東の空と海との陽光と、潮の響とが、やがて新しい春を告げるのを私はそこで喜んだ。

一三 伊勢物語抄

一 惟喬の皇子

惟喬親王
文德天皇の第一皇子。小野宮と稱する。
水無瀬
今の大阪府三島郡島本村。

右の馬の頭
在原業平。

在
原
中
時

交野
大阪府北河内郡牧野村附近。



清の院の櫻

狩する交野の渚の院の櫻殊におもしろし。その木の下におりて、枝を折りて、かざしにさして、皆歌詠みけり。かの馬の頭の詠める、

昔、惟喬の皇子と申す皇子おはし

ましけり。山崎のあなたに水無瀬と

いふ所に宮ありけり。年ごとの櫻の

花盛には、その宮へなんおはしまし

ける。その時、右の馬の頭なりける人

を常におておはしましけり。狩は懇

にもせで、大和歌にかゝれりけり。今

平
中
時

よの中にたえて櫻のなかりせば春のこゝろはのどけからまし

また、人の歌

散ればこそいとど櫻はめでたけれうき世になにか

久しかるべき

歸りて宮に入らせ給ひぬ。夜更くるまで物語して、主人の皇子入りて、大殿ごもり給ひなんとす。十一日の月も隠れなんとすれば、かの馬の頭の詠める、

あかなくにまだきも月のかくる、か山の端にげて

入れずもあらなん

かくしつゝ、詣で仕うまつりけるを、皇子思の外に御髪おろさせ給ひて、小野といふ所に住み給ひけり。正月に拜み奉らんとて詣でたるに、比叡の山の麓なれば、雪いと高し。しひて御室に詣で

小野
京都府愛宕郡大原村。

て拜み奉るに、つれづれといとももの悲しくておはしましければ、
や、久しく侍ひて、いにしへの事など思ひ出でて聞えさせけり。
さても侍ひてしがなと思へど、公事どもありければえ侍はで、夕
暮に歸るとて、

忘れては夢かとぞ思ふ思ひ
きやゆきふみわけて君を見

んとは

とてなん泣くく來にける。

二 さらぬ別

昔、男ありけり。身はいやしけれど、

母なんみこなりける。その母、長岡といふ所に住み給ひけり。子は
京に宮仕しければ、まうづとしけれど、しばくえまうでず。一人
の子にさへありければ、いとかなしうし給ひけり。さるほどに、師

わかれのゆえに
なほいふやゆふと
きこふしんが
こころをいふ
なほいふやゆふと
きこふしんが
こころをいふ
なほいふやゆふと
きこふしんが
こころをいふ

本 寫 古「語物勢伊」

一五 梅花の氣品

豊島與志雄

梅花の感じは氣品の感じである。

氣品は一の芳香である。眼にも見えず耳にも聞えない或風格
から發する香である。甘くも酸くも辛くもなく、それ等のあらゆ
る刺激を超越した、えもいへぬ香である。人をして思はず鼻孔を
ふくらませる無味無臭の香である。それと明らかに捉へること
は出来ないが、それと明らかに感じ識られる一種獨得の香であ
る。なぜにもなく、どこからともなく、どこへともなく、おのづか
ら發散して漂つてゐる浮游の香である。

これはまた梅花の香である。うつすらと霧のこめてゐる未明
の微光に、或は淋しい冬の日の明るみに、或は佗しい夕べの靄に、
或は冷えくとした夜氣にほのかに織りこまれて、捉へ難く觸

難く、たゞ脈々と漂つてゐる一種獨得の梅花の香は、俗塵を絶した氣品の香である。その香を感じてその花を求めるのは俗であり愚である。花のありかを求めないで、漂つて來る芳香に心を澄ます時、氣品の本體を識ることが出来る。

氣品はまた一の凜乎たる氣魄である。衆に媚びず、孤獨を恐れず、己の力によつてみづから立ち、驕らず、卑下せず、霜雪の寒さにも自若として己自身にほゝゑみかける搖ぎのない氣魄である。肥大でなく、矮少でなく、膨脹せず、萎縮せず、賑やかでなく、淋しくなく、たゞあるがまゝに充ち満ちて、空疎を知らず、漲溢を知らず、恐れることがなく、蔑むことのない清爽たる氣魄である。

これはまた梅花の氣魄である。霜雪の寒さを凌ぎ、みづからの力で花を開き、春に魁してほゝゑみ、しかも驕ることなく、卑下することなく、爛漫たる賑やかさもなく、荒涼たる淋しさもなく、た

藤原忠良

樗^{あしもち}咲く外面の木蔭露落ちてさみだれ晴る、風わたるなり

藤原定家

見わたせば花も紅葉もなかりけり浦の苫屋の秋のゆふぐれ

藤原良經

雲は皆拂ひはてたるあきかぜを松に残して月を見るかな

寂蓮法師

たえどに里わく月の光かな時雨を送る夜半のむらさめ

藤原家隆

明けばまた越ゆべき山の峰なれや空行く月の末の白雲

藤原雅經

影宿す露のみ茂くなりはてて草にやつるゝふるさとの月

西行法師

風に靡く富士の煙の空に消えて行方も知らぬ我が思かな

大僧正慈圓

有明の月の行方を眺めてぞ野寺の鐘は聞くべかりける

凡河内躬恒

住の江の松を秋風吹くからに聲うちそふる沖つしらなみ

壬生忠岑

山里は秋こそ殊にわびしけれ鹿の鳴く音に目をさましつゝ

詠人不知

大空の月のひかりし清ければ影見し水ぞまづ氷りける

小野千古の母

たらちねの親の守と相添ふる心ばかりはせきなとゞめそ

小野 篁

わたの原八十島かけて漕ぎいでぬと人には告げよ蟹
の釣舟

惟喬 親王

白雲の絶えずたなびく嶺にだに住めば住みぬる世に
こそありけれ

新古今集より

式子内親王

山深み春とも知らぬ松の戸にたえぐかゝる雪の玉
水

藤原 俊成

またや見む交野のみ野の櫻狩花の雪散る春の曙

走ばかりに、とみの事（トミノコト）として、御文あり。おどろきて見れば、こと言（ことば）は
なくて、

老いぬればさらぬ別のありといへばいよく見ま
くほしき君かな

となんありける。

これを見て、馬にも乗りあへず参るとて、いといたううち泣き
て道すがら詠める、

世の中にさらぬ別のなくもがな千代もと祈る人の
子のため

（伊勢物語）

一四 古今調と新古今調

古今集より

袖ひぢてむすびし水の氷れるを春立つけふの風やと
くらむ

紀 貫之

久方の光のどけき春の日にしづこゝろなく花の散る

紀 友則

らむ

蓮葉のにごりにしまぬ心もてなにかは露を玉とあざ

僧 正 遍 照

むく

がら頭の上を過ぎて行つた。ちやうど一塊の朽葉のやうに折り
かさなつた瓦屋根をもつ丘の麓のアテネの町は、その曲折した
小道に往きかふ人の影も少く、やがて夜となれば、星もない空の
下に、年月馴れて来た沈黙の眠に入らうと待つてゐる。

あゝ、何年私はこの都に訪ね来る日を想像してゐたであらう。
星のさゝやくイリソスの小川、橄欖の影深い學園の庭、或はデモ
ステネスの像をもつ市場の賑はひ、圓盤は音さわやかに空に飛
ぶ競技場、まだ見ぬアテネの町の姿は、いつか自分の心に己の住
む町のやうに親しいものとなつてゐた。

ちやうど二週間ほど前、バルカンの港を通ふ汽船の上に身を
預け、南イタリーのブリンデイシからコルフの島を過ぎ、歴史の
海を渡つて、始めてギリシヤの島山を望み見た時、私の心はどん
なに躍つたであらう。波なきサラミスを横切りながら港に近づ

デモステネス
古代アテネの
雄辯家。

コルフ
ギリシヤの西
北端にある小
島。

バルセノン
アクロポリス
丘山にあるア
テナの神を祀
る神殿

海上同盟

古代ギリシヤ
がベルシヤの
襲撃に備へる
ため、沿岸諸
市と結んだ同
盟。
テセウス
ギリシヤ神話
中の英雄
デイピロン
アテナの西北
隅。

くその船から、アテイカの平野に兀焉として聳え立つアクロポリスの丘の上、壊れかけた破風を、數本の石柱に支へて残るバルセノンの神殿を、私はいかに深い感佩をもつて望み見たであらうか。小脇に抱へた小さい旅の荷と共に飛乗つた舳の上でさへ、尊いギリシヤの土をこの足に踏むその喜を待ちかねた。あゝしかし、私はその日から、何といふ深い失望を味ははなければならなかつたか。冬には用もない海水浴場と、近世風のコーヒー店が並んだ貧しい海岸の町、それが海上同盟の誇を謳つたヒレウスの港の今日に映る景色であつた。私は疲れることもなく、アテナの町を日ごとにさまよつた。アクロポリスの丘、テセウスの神殿、デイピロンの墓場、それから名も知らぬ町や丘や野や河畔に、失はれたギリシヤの國を探して歩いた。氣高い神殿は、いつその姿をかくしたであらう。裸身の神々はいづこの空に去つたのか。そ

害せられてゐない伸びやかな環境の中に、一本の老木が自然のまゝの枝ぶりに、ぼつり／＼と花をつけ、ほのかな香を漂はしてゐるのを、少し冷やかな二月の夜明、薄霧の晴れやらぬ頃、爽かな空氣を吸ひ、小さな霜柱を踏んで、ふと氣づいたまゝ、何氣なく足をとめてしみ／＼と見入り嗅入る心持、それこそ眞に梅花を觀る境地である。その一本の老樹のたゞずまひと、その清らかな花の姿と、その脈々たる香と、その清冷な早朝の空氣とは、共に梅花の氣品となつて、人の心にしみとほるであらう。これをも卑俗といふのは、卑俗ばかりを知つて高潔を知らぬからである。

アクロポリス
古代アテネの
城砦で、アテ
ネ市外にある
岩山。
アテイカ
アテネ地方の
汎稱。

一六 アテネの夕日

團 伊能

今日もアクロポリスの丘に夕日を送る。まだ忍冬すのかづらの花咲く春に遠い二月の半ば、雲は低く空を閉し、北山から吹きおろす風は、神殿の石柱の肌を空しく搏つ。見おろせばアテイカの平野は霜枯れて色もなく、白い街道に沿ふ絲杉の並木ばかり、喪服を着けた女のやうに憂鬱な暗緑色をしてたゞずんでゐる。農家の屋根から流れる煖爐の煙は、葉を吹拂はれた橄欖の茂みを縫ひながら、薄青く山並の裾を匍ひ、西に廣がるサラミスの海は、鉛色の水面に、冬の雲間を落ちる夕日を淡く照返すかと見る間に、それもまた力なく消えてしまふ。外國船であらう、檣かざらの高い船が二三艘沖がかりをしてゐるピレウスの港から、太く長い汽笛の音が流れて来て、人の心に旅愁を誘へば、罉かめを知らぬ鳥が二三羽、迷ひな

ピレウス
アテネの西南
サラミスの湾に
臨む港。

に藏した老幹と、老を生いせる力で伸上る若枝とが、しつくりと一つの氣分にまとまつて、苔の生えた古い樹皮と、艶々した新たな樹皮とが、一樣に花を開いてゐるのは、まさに氣品そのものの姿である。老いた枝にも若い枝にも、一樣に咲きにほつてゐる梅花を眺めると、輕佻と鈍重を超越した氣品の沈靜に味あじ到することが出来る。

氣品はこの世には稀である。それは地上のものといふよりも、むしろ多く天上のものであるからである。地上ではその本來の面目を汚されるといふのではないが、そこに在るのにはあまりに清らか過ぎる。しかし、それを地上に引下して己の所有としたところに、人の魂の朗かさがある。地上から天上へと人の魂が架渡した多くの橋梁の中の一つが、そこにあるともいふことが出来る。それゆゑ、氣品はどんな人にも親しまれ易い。

梅花の感じは氣品の感じであるけれども、梅花は一の抽象でなくて、一の具象である。随つて人に親しまれ難い。あまりに芳しい香を漂はせ、あまりに凜乎たる氣魄を示し、あまりに清らかな色彩を有し、あまりに妙味のある樹に咲くので、人間ばなれのした感じをもつて人を卻けがちである。しかし、梅花に瞳を定め、その香に心を澄ますことは、必ずしも詩人にとつてばかりでなく、普通の人にとつてもよい。なぜかといふに、それは地上の息吹は天上の息吹を交へることだからである。梅花には人間味が少いから、新な心をもつて梅花に接し、新な心をもつて梅花に親しむことは、人間にとつてますますよい。この意味において、眞に梅花を観るのには、雑沓の巷や、廣い梅林や、人工的な盆栽や、または月明の夜などにおいてよりも、むしろ自由な晴々とした境地においてするがよい。必ずしも美景を要しないが、たゞ自然の風趣の

だ靜かに己の分を守つて、寒空に芳香を漂はしてゐる梅花の姿は、氣品そのものの氣魄である。しみじみと梅花に見入ると、恐怖や蔑視や悲哀や歡喜など、すべて心を亂すやうな情緒は靜まつて、たゞ氣高い氣品の氣魄に打たれるであらう。

氣品はそれ自身の性質からして清淨であり、白色であるべきである。赤や青や黄など、何らかの色に染められた氣品は世に存しない。もとより赤や青や黄や紫など、さういふ色彩がもつことの出来る氣品はあるけれども、氣品そのものの色はどこまでも白色である。しかし、單に白色だけでは足りない。純白の氣分を破らない程度において、何らかの點彩を要する。鮮かな一點の色彩を包んだ純白、それが氣品の色である。

これはまた梅花の色である。黎明や薄暮の微光の中に浮出すほの赤いまでの白色、白晝の外光や深夜の闇の中に浮出すほの

蒼いまでの白色、または月光に照らし出される薄紫にまがふま
での白色、その白色の花弁の中に花粉の黄を小さく點出した色
彩は、氣品そのものの色彩である。これに瞳を凝らす時、おのづか
ら心がすが／＼しくなつて、氣品の妙趣を悟ることが出来る。
氣品には一の滋味があり、しかも同時に一の新鮮味がある。氣
品は舊陋でもなく新奇でもない。純粹の氣品は、骨董と新考案を
包含し、兩者を調和したものである。老と若と舊と新を寄せ集め
て、しかもそのどれでもなく、老と舊の滋味を取り、若と新の新
鮮味を取つた一種恆久的のものである。古さから來る佶屈聱牙
と、新しさから來る自由暢達と、この兩者を具有して、しつくりと
おちついたものである。

これはまた梅花のおちつきである。銳角度をなしてぐいぐい
と曲つた古木から、すい／＼と若芽を伸し、若きを育てる力を内

アテナ
ギリシヤ神話
の女神。ゼウ
スの女。アテ
ネの守護神。

ペリクレス

古代ギリシヤ
の大政治家。
アテナの政を
執つて、ギリ
シヤの黄金時
代を現出せし
めた。

ペンテリコン
アテカ山の北
方にある山

して私が見出したのは、枯草に蔽はれた礎や、碎け落ちた柱頭の
花飾や、また博物館の内に閉ぢこめられ、手を失ひ、足を折り、時に
頭さへ残らない奇異な石彫の破片ばかりであつた。

その昔アテナの市民は船型の花車を曳きながら、祭司や長老
を始めとして、男は酒壺を擔ひ、女は花を翳し、武人は騎馬の蹄勇
ましく岩地を踏んで、アテナの神の神殿に集つた祭の有様を思
ふよしもなく、アクロポリスの丘には、その破風ばかり寂しく殘
るパルセノンや、屋根は崩れ落ちた勝利神ニケの宮、或は美しい
女の姿を柱とした數本の人像柱を殘すアテナの建國の王エレ
クテイウスの神殿を繞つて散亂する石の破片に、夏は雲雀が巢
くひ、冬は枯草に寒風が泣くのを聞くばかりである。

ペリクレスは名工フィデアスをして、ペンテリコンの山に白
皙の大理石を求めしめ、アクロポリスの丘に築いた諸神殿の中

ドリア式
の古代ギリシヤ
の建築様式の一。

ボセイドン
のギリシヤ神話
の海神、楡を
持った老人の
姿に造る。



にも、アテナに捧げたパルセノンには、ドリア式の豪壯な規模、均衡
すぐれたその比例において及
ぶものがなかつた。フィデアス
はみづから金と象牙とをもつ
て兜の光勇ましいアテナの神
像を刻み出し、空に立つその神
殿の破風には、この丘の神話に
残るアテナと海神ボセイドン
の争をその群像の構圖の中に
おもしろく附加へた。まだ神々
の世であつた頃、ボセイドンと
アテナとはこの丘を得んと互
に争ひ、大神ゼウスの裁きを請うた。ゼウスは二人が各すぐれた

パ
ル
セ
ノ
ン

力を己の前に示すべく命じた時、ボセイドンは忽ちこの岩上に
海水の泉を吹出さしめれば、アテナは騒がずその水中より美し
き橄欖の一本を生えしめ、ゼウスは終にこゝをアテナの神に與
へたといふ。この美し
き物語を思ひ出して
振仰ぐ柱の上には、殘
れる神像の影もなく、
傾き立つたその破風
はフィデアスの非運
を嘆き、己の變る姿を恥ぢるかのやうに夕日の中にためらつて
ゐる。



アテナの神像

知見にすぐれたアテナ人は、早く人文の扉を開き、ギリシヤの
霸權を握りながら、理念と節操を缺いたその市民は己の功利の

テミストクレ
ス

古代ギリシヤの將家、海軍を擴張し、奇策をもつて、ペルシヤの海軍を撃破した。

ために人を陥れて顧みず、神の如きソクラテスに毒を盛つたばかりでなく、天才フィデアスもペリクレスを羨む人々の讒訴に遇ひ、終にこの都を見捨てて去らなければならなかつた。人々は彼が造つたアテナの像に國家が與へた金塊を私したと訴へ、彼はこの神像よりその金を取外し、その重量を示して一旦己を明らかにしたが、更にこのアテナの神の楯に、彼が己とペリクレスの肖像を神の姿の間に加へたといつて誹謗し、彼を捕へて牢獄に下した。

テミストクレスの奇しき海の勝利によつてもたらされたアテナの隆盛も、思へば短い間であつた。西曆紀元前四百二十九年、ペルセポリスの港にアフリカより傳へられた黒死病は、ペリクレスを奪つたばかりでなく、アテナの市民の半ばは犠牲とし、その威信漸く傾けば、スパルタ軍は五度この町を圍み、やがて

その將軍リザンドルに城門を開いて降るが如き屈辱に陥つた。デモステネスの愛國の熱辯をもつて連邦を説いても、マセドニアの武力に抗し難く、幾度か呼返さんとする昔の隆盛はますます失敗を重ねて、終にアテナの名譽はアレキサンダーの手中に落ち、はてはローマに貢するに至つた。藝文の華は一たびこゝに咲出でて、その胚子を世界に吹送り、イタリーの野に、アフリカの岸邊に豊麗の果を結んだ時、この老幹には再び花をつける日は來なかつた。パルセノンの神殿さへ、東ローマの治政の下にあつては、十字を揚げるキリスト教寺院に改められ、オスマントルコの所領となれば、落日に祈る回教僧の祈の聲のみその尖頭から頂から聞えた。千六百八十七年たま〜トルコとベニスの戦端に當り、火藥の庫としたこの神殿は、ベニスの海軍の砲撃によつて爆發し、崩れながらに残つた昔の姿も終を告げたのである。十

バイロン
十八世紀後半
から十九世紀
初頭にかけて
のイギリスの
詩人。

〔禁轉載〕

九世紀の初、イギリス大使エルギン卿は、この丘にこぼれた石彫
を拾ひ集めてロンドンに送り、大英博物館に納めて人に示すま
で、バルセノンも、フィデアスも、たゞ人類の忘却の中に眠つてゐ
たのであつた。

暮れそめてゆくアテイカの平野、その瘠せた土、その枯れた樹、
その朽ちた墓には希望の色もなく、光榮の日から過して來た長
き忍従と屈辱の歴史をのみ私の胸にさゝやく。詩人バイロンは
劍を執つて戦陣に斃れ、名譽の獨立は古きギリシヤに蘇つても、
あゝ、その昔の日は返つて來るであらうか。アクロポリスの冬の
落日、朽ちるが如く聲もなく靜かに去りゆくアテイカの夕日、何
といふ寥寂の色であらう。神殿の廢墟に薄れてゆくその淡い光
を私は兩手に捕へようとして石柱を抱いた。

一七 壇の浦

さるほどに、源氏の兵どもいとど力を得て、平家の船に漕寄せ
漕寄せ亂れ乗る。遠きをば射、近きをば斬る。たて横さんぐに攻
む。水手かんどり櫓を棄て楫を捨てて、船を直すに及ばず、射伏せ
られ、切伏せられ、船底に倒れ、水の底に入る。中納言は女院、二位殿
などの乗り給へる御船に參られたりければ、女房たち、こはいか
になりはべりぬるぞ。と宣ひければ、今はともかくも申すに言葉
足らずかねて思ひ設けたる事なり。とてうち笑ひ給ふ。手づから
船の掃除して、見苦しきものども海に取入れ、こゝ拭へ。かしこ拂
へ。など宣ふ。さほどの事になりはべりけるか。とて、女房たち聲々
喚き叫び給ふ。

中納言
平知盛。
女院
高倉天皇の中
宮、建禮門院
平徳子。
二位殿
清盛の後室、
平時子。

彌生
壽永四年。

小松大臣
右大臣平重盛。

り給ひけん、あはれといふも愚かなり。
女院は後れ奉らじと、御焼石と御硯の箱とを、左右の御袂にや
どし入れ、御身を重くして續きて海に入らせ給ひけるを、渡邊源
次兵衛尉番が子に源五馬允呢といふもの急ぎ飛入つて、かづき
上げ奉りけるを、呢が郎等熊手をおろして、御船に引入れ奉る。彌
生の末のことなれば、藤重の十二單の御衣を召されたり。翡翠の
御髪より始めて、皆しほたれおはしますぞ御痛はしき。呢はもし
やの時とて、鎧唐櫃の底に持ちたりける唐綾の白小袖一重取出
して、女院にまゐらせたりけるは、夷なれども情あり。呢は近くは
参り寄らず、程を隔て畏まりて、君は女院にてわたらせおはしま
すか。と度々尋ね申しければ、御覽じ馴れぬ夷の有様恐しく思し
召しければ、御言葉をば出させ給はず、二度うち頷かせ給ひけり。
前左馬頭行盛は基盛の子、前左少將有盛は小松大臣の息男、共

に太政入道の孫なり。同船しておはしけるが、軍のさま今を限と
思ひければ、冑を脱捨て、鎧の袖切落し、身を軽くして舷に進み出
づ。有盛先陣に在りて、源氏の兵と射合ひけり。行盛は暫し最後の
所作と思しくて、船の舳頭にして提婆品をぞ讀み給ふ。一品既に
終りければ、西に向かつて廻向して、有盛と立ちならび、矢じりを
そろへて射けるにこそ、數の兵も亡びにけれ。熊井太郎忠元、江田
源三弘基以下の輩、舟を押廻して兩方より乗移りければ、行盛有
盛弓をば棄て、劍を抜き、心をたわめず、命を惜しまず、艦舳にめぐ
りてさんぐに戦ひ、首をならべて討死してぞ亡せにける。勇兵
のふるまひ尤もとぞ覺えける。

二

源氏の郎等に後藤三範綱は、平家の船に飛入りて、弓をば捨て、
打物抜いて走り廻りけるを、越中次郎兵衛盛嗣寄せあひ組んで

かさなり、上になり下になり、船中を五ころび六ころびしければ、互に刀を抜く隙もなかりけるところに、盛嗣を助けんとて悪七兵衛景清、範綱をば刺してけり。

前能登守教経はもとより心剛ツヨクに身すこやかにして、進むことありて退くことなし。軍敗れぬと見えければ、思ひきり死生知らずしにふるまふ。これぞ聞ゆる能登守とて、我先にくと争ひてかかりけれども、少しも面をふらず戦ふ。矢頃にまはるものをば、さしつめさしつめ射けるに、更にあだ矢なし。近づくものをば引寄せ、提げて海に投入れければ、面を向け難し。太刀にて切るは少く、水にはむるは多し。

前中納言知盛卿これを見て、よしなきことし給ふものかな。このともがらは皆少兵にこそはべりぬれ。あながちに目に立て給ふべきにあらず。自害をもし給へかし。」と宣へば、さては九郎冠者

に組めとにこそ、それは存ずるところなり。いかゞいかゞはせん。」と窺ひめぐるところに判官の船と能登守の船とすりあはせて通りけり。能登守然るべしとて判官の船に乗移り、冑をば脱捨て大童になり、鎧の袖草摺ちぎり捨て、軽々と身をしたゝめて、いづれ九郎ならんと馳せめぐる。判官かねて存知して、とかく違へて、組まじ組まじと紛れ行く。さすが大將軍と覺えて鎧に小長刀突いて武者一人あり。能登守目をかけて、軍將義経と見るは僻目か。故太政入道の弟、門脇中納言教盛の二男に能登守教経と名のりにこと笑ひて飛びかゝる。判官は組んではかなはじと思ひて、尻足踏んでぞやすらひける。大將軍を組ませじとて郎等どもが立隔て立隔てしけれども、のけ、やつばら。人々し。とて海の中に蹴入れ取入れ、つと寄る。既に判官に組まんとしければ、判官早業人に勝れたり。小長刀を脇に挟み、さし潛りて、弓たけ二つばかりなる隣の船

へつと飛移り、長刀取り直して、舷ににこと笑ひて立ちたりけり。能登守は力こそ勝れたりけれども、早業は判官に及ばねば、力なくして船に留り、あゝ飛びたり、飛びたり。とほむ。その後能登守、今を限と狂ひまはりければ、面を向け難し。こゝに安藝太郎時家といふ者あり。これは安藝の國の住人にもなし、安藝守が子息にもあらず、阿波の國の住人安藝大領といふものが子なり。三十人が力持ちたりと聞ゆ。郎等二人あり。同じく三十人づつ力あり。時家二人の郎等にいひけるは、我等三人心を一つにして組まんには、鬼神といふとも負くまじ。能登守強しといふとも、やは三人には勝ち給ふべき。三人取つて合はすれば九十人が力なり。私の力業は人の證據に立たず。能登守に組んで、力をも人に知らせ、剛の名をも極めんと思ふはいかに。といへば、郎等子細にや及ぶべき。とて、三人一度に鍛を傾け、うつてかゝる。能登守は、源氏の郎等に名

もあり力もあればこそ、教經にはかゝるらめ。これぞ軍の最後なると思ひければ、しづくくと相待つところ、三人鼻を並べ、隙間もなくつと寄る。一人をば海中にたふと蹴入れ、二人をば左右の

源平盛衰記巻一
祇園精舎の鐘の聲訪りて常のいさ
ありしや、櫻樹の花の色、遊者必まの
いさ、極さるる者、久わくは、
いさ、極さるる者、久わくは、
いさ、極さるる者、久わくは、
漢王莽、梁朱異、唐祿山、也、清主

源平盛衰記古寫本

脇にかい挟んで、一しめしめて、いざ、おのれら、教經が御伴申せ。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。とて、海の底にぞ沈みける。

前平中納言教盛、同中納言知盛卿は、一所におはし

けるが、伊賀平内左衛門を召されて、いかに家長、見るべき事は見つ。先帝をはじめまゐらせて、一門の人々自害し、海に入りぬ。今までもかくあれば、つれなき命を惜しむに似たり。大臣殿はいかに

右衛門督
平清宗の長子。宗盛

なり給ひぬるやらん」と問ひ給ふ。家長涙を流して、大臣殿・右衛門督殿二人は一度に海に入り給ひたりつるを、敵熊手にかけて奉りて、二所ながら引上げ、捕り参らせ候ひぬ」と申しければ、知盛卿は



あな心うなど深くは沈み給はざりけるぞ」と二度宣ひて、
教 涙をはらくと流して、今は
経 何をか見聞くべき。家長日比
の 最の約束はいかに」と仰せられ
期 ければ、今更君に離れ奉りて
い づちへ行くべきに候はず。

御伴なり」と申せば、知盛卿よに嬉しげに思ひて、平中納言教盛卿と、鎧脱捨てて、西に向かひ念佛申して、兩人自害せられければ、有國家長以下侍八人、同じ枕に自害して伏しぬ。知盛卿は猛將の聞

蜀江
四川省成都にあつて、蜀の名産錦を洗つたといふ川

辱しめず、教盛卿は武勇の名に劣らず、共に命を西海に亡し、互に譽を東路にぞ傳へたる。あはれ、この人に世を譲りたらば、たとひ運のきはみなりとも、都にていかにもなり給ひなまし」と惜しまぬものはなかりけり。
赤旗赤符海上に充ち満ちて、紅葉を嵐の吹散らしたるが如し。海水も血に變じて、渚々に寄する波、薄紅にぞ流れける。主を失へる船は風に隨ひ、潮に引かれて、越路の雁の行を亂るが如く、膚を離れたる衣は水に浮き、波にあらそうて、蜀江の錦の色を洗ふかと疑はる。玉樓金殿の昔の榮華、船中、浪の底の今の有様、思ひならべてあはれなり。

(源平盛衰記)

こゝに
土御門天皇の
建永頃
旅人の云々
慶滋保胤の
「池亭記」に見
える語。

一八 日野山の閑居

こゝに六十の露消え方に及びて、更に末葉の宿りを結べるこ
とあり。いはば旅人の一夜の宿りを作り、老いたる蠶の繭を營む
が如し。これを中頃の住家になずらふれば、また百分が一にだも
及ばず。
とかくいふほどに齡は年々に傾き、住家は折々にせばし。その
家の有様世の常に似ず。廣さは僅かに方丈、高さは七尺が内なり。
所を思ひ定めざるがゆゑに、地を占めて作らず。土居を組み、打覆
を葺きて、繼目ごとにかねがねをかけた。もし心に適はぬこと
あらば、易く外に移さんがためなり。その改め作る時いくばくの
煩かある。積むところ僅かに二輛なり。車の力を報ゆる外は、更に
他の用途いらす。

日野山
京都府宇治郡
醍醐村にある。

「往生要集」
平安時代の高
僧、源信の著

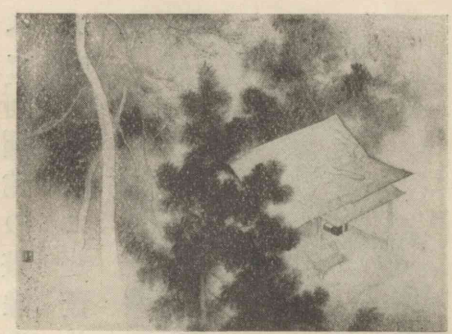


鴨長明

今、日野山の奥に跡を隠して後、南に假の日がくしをさしいだ
して、竹の簀子を敷き、その西に闕伽棚を作り、内には西の垣に沿
へて、阿彌陀の畫像を安置しまつり、落日を受けて眉間の光とす。
かの帳の扉に華賢並びに不動の像をかけた。北の障子の上に
小さき棚を構へて、黒き皮籠三四合を
置く。即ち和歌管絃、往生要集、如きの抄
物を入れたり。傍に箏、琵琶、おのゝゝ一
張を立つ。いはゆる折箏、繼琵琶、これな
り。東に沿へてわらびのほどもを敷き、
つかなみを敷きて夜の床とす。東の垣
に窓をあけて、こゝに文机をいだせり。枕の方に炭櫃あり。これを
柴折りくぶるよすがとす。庵の北に小地を占め、あばらなる姫垣
を圍ひて園とす。即ちもろゝの藥草を植ゑたり。假の庵のあり

さまかくの如し。

その所のさまをいはば、南に筧あり、岩をたゞみて水を溜めた
り。林軒近ければ、つま木を拾ふに乏しからず。名を外山といふ。正



居閑の山野日

木のかづら跡を埋めり。谷しげけれど西
は晴れたり、觀念の便りなきにしもあら
ず。春は藤浪を見る、紫雲の如くにして、西
の方にほふ。夏は杜鵑を聞く、語らふご
とに死出の山路を契る。秋は蝸の聲耳に
満てり、空蟬の世を悲しむかと聞ゆ。冬は
雪を憐む、積り消ゆるさま罪障に喩へつ
べし。もし念佛もの憂く、讀經まめならざ
る時は、みづから休み、みづから怠るに妨ぐる人もなく、また恥づ
べき友もなし。ことさらに無言をせざれども、ひとりをれば口業

云跡の白波に云

「世の中をな
ににたとへん
あさぼらけ漕
ぎゆく船の跡
の白波」拾遺
集卷二十所
載

岡の屋

京都府宇治郡
宇治村

満沙彌
満沙彌彌。奈
良時代の人。

桂の風云々
「薄陽江頭夜
送客。楓葉
荻花秋瑟々」
(白樂天)

源都督

桂大納言經信。
平安時代の琵琶
の名手。

秋風流泉
共に琵琶の名
曲。

を修めつべし。必ず禁戒を守るとしもなければ、境界なければ
何につけてか破らん。もし跡の白
波に身を寄するあしたには、岡の
屋に行交ふ船を眺めて、満沙彌が
風情をぬすみ、もし桂の風葉を鳴
らすゆふべには、薄陽の江を想ひ
やりて、源都督のながれをならふ
もしあまりの興あれば、しばし
松の響に秋風の樂をたぐへ、水の
音に流泉の曲をあやつる。藝はこ
れ拙けれども、人の耳を喜ばしめ
んとにもあらず。ひとり調べ、ひと
り詠じて、みづから心を養ふばかりなり。

大福寺本「方丈記」

おほかたこの所に住みそめし時は、あからさまと思ひしかど、
今既に五とせを経たり。

假の庵もや、ふる屋となりて、軒には朽葉深く、土居に苔むせ
り。おのづからことの便りに都のさまを聞けば、この山にこもり
ゐて後、やむごとなき人の隠れ給へるもあまた聞ゆ。ましてその
數ならぬたぐひ、つくしてこれを知るべからず。度々の炎上に亡
びたる家またいくそばくぞ。たゞ假の庵のみのどけくしておそ
れなし。

程せばしと雖も夜臥す床あり、晝ゐる座あり、一身を宿すに不
足なし。がうなは小さき貝を好む。これよく身を知るによりてな
り。みさごは荒磯にをる。即ち人を恐るゝがゆるゑなり。我またかく
の如し。身を知り世を知れ、ば願はず、まじらはず、たゞ靜かなる
を望とし、愁なきを樂しみとす。

それ三界はたゞ心一つなり。心もし安からずば、牛馬七珍もよ
しなく、宮殿樓閣も望なし。今寂しきすまひ一間の庵、みづからこ
れを愛す。おのづから都に出でては、乞食となれることを恥づと
いへども、歸りてこゝにをる時は、他の俗塵に着することをあは
れぶ。

もし人このいへることを疑はば、魚鳥のありさまを見よ。魚は
水に飽かず、魚にあらざればその心を知らず。鳥は林を願ふ、鳥に
あらざればその心を知らず。閑居の氣味もまたかくの如し。住ま
ずして誰かさたらん。

ソーン
フランスの東
部にある川。
ベンヌ
フランスの西
部にある川。
ガロンヌ
フランスの南
部にある川。

一九 隅田川の水

島崎藤村

流れよ、流れよ、隅田川の水よ。少年の時分からのお前の舊なじみが、またお前の懷裡へ歸つて來た。旅にある日、ソーン・ベンヌ・ガロンヌなどの河畔に立つて私が思ひ出すのは、いつまでもお前のことだつた。パリのアウステルリッツの橋の畔あたりからセーヌの水を眺めた時にも、私の遠く送る旅情は、お前の方にあつた。私はお前の岸に歸つて來て、再びお前の水を見得ることを喜ぶ。

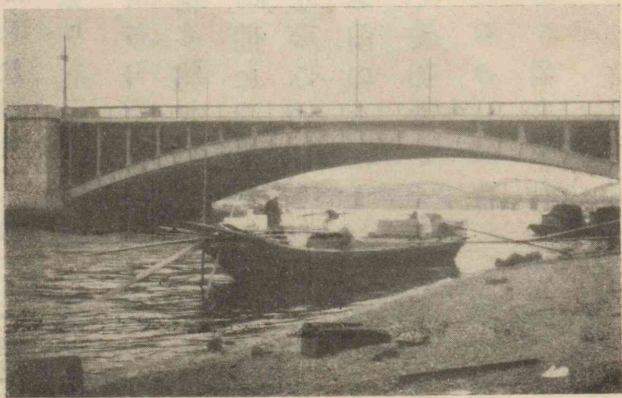
私が旅に出た時分から見ると、お前は一層黙つてしまつたやうな氣もする。お前の聲はどうしたらう。いつまでお前はそのやうに沈黙を續けてゐるのだらう。お前の河岸の變遷と工業化とに壓せられて、お前の白魚が死に、お前の都鳥が飛去つたやうに、

お前の聲も涸れはてたのだらうか。遙かに川上の方から渦巻き流れて來るお前の水がある限り、お前の詩が涸れはてようとはどうしても思はれない。私はお前から溢れて來る詩を知りたい。お前の沈黙を破つた聲を聞きたい。

随分お前も長い目で岸の變遷を眺めて來た。兩岸が武藏野であつた昔からのお前だ。そこに建てられた大きな都の發達を知り盡くして來たお前だ。舊兩國が一切の交通の中心で、用を足すにも、物を運ぶにも、舟の便利に頼らなければならぬ時代からのお前だ。お前は驚くべき大改革をまのあたりに見て來た。江戸の崩壊を。政治の改變を。憲法の制定を。廣く知識を世界に求めようことを。世界のありとあらゆる所から採得る限のものを採らうことを。これがお前の見た維新當時における熾盛な精神ではなかつたか。新しいものが、かくしてお前の岸へ押寄せて來た。ア

クラシック
古典的な、
風なもの、
古

氣がして、傷々しくてならない。今になつてこの不調和を嘆くのは遅いかも知れない。しかし、我々日本人が、あまりにクラシックを棄過ぎたと氣づくことは、決して遅いとはいへない。我々は廣く知識を世界に求めるほどの鋭意と同情とに富んでゐる。たゞ我々はそれを受容れるに當つて、強い判断力を缺いた。言葉を換へていへば、歴史的の意志を缺いた。それが我々の缺點だ。我々は自己の支配者ではなくなつてしまつてゐた。たゞ新しいものはいつて來るに委せてゐた。お前の岸にある不思議な不統一。私はそれ



川 田 隅 の 今



來た組織的なもののため、何となく蹂躪されてしまふやうな

アメリカからも、フランスからも、ドイツからも、そして改良に次ぐに改良、破壊に次ぐに破壊をもつてした結果、それ等の性質を異にしたものが、各自思ひ思ひの様式と主張と確執とをもつて、雜然紛然たること、あたかも植民地の町を見る如くにお前の兩側に移植された時代の象徴とも見るべき造形美術、殊に建築を見わたすと、お前の岸にあつたものがあまりに弱となしく、あまりに弱々しく、あまりに纖細で、新しく西洋からはいつて

多情多感な詩
人が云々
在原業平が隅
田川の都鳥を
見て名にし
負はばいざこ
ととはん都鳥
我が思ふ人は
ありやなしや
と詠んだ。

をお前に問ひたい。お前がまのあたり見た驚くべき大改革は、人の心に『推移』をばもたらしたらう。しかしながら、人の心の奥に『改革』をもたらしたらうか。と、それを思ふと、私はいひ難い幻滅の悲哀に打たれる。お前はセーヌでもなく、テムズでもなく、やはり一番親しみの深い隅田川だ。往昔、多情多感な詩人が嘴の紅い都鳥を見て、家人の生死を尋ねた歌をお前に遺した。それほど古い歴史のあるお前だが、私は若いお前を夢みつゝ、それを頼りにして、遠い旅から歸つて來た何となくお前の水はまだ薄暗い。太陽の光線はまだお前の岸に照りわたつてゐないやうな氣がする。お前の日の出が見たい。

二〇 隅田川

ワキ 詞「これは武藏國隅田川の渡守にて候。今日は舟を急ぎ、人々を渡さばやと存じ候。またこの在所にさる仔細あつて、大念佛を申すことの候間、僧俗を嫌はず、人數を集め候。その由皆々心得候へ。」

ツレ 次第末も東の旅衣、日も遙々の心かな。詞かやうに候ものは、都のものにて候。我、東に知る人の候ほどに、かのものを尋ねて、たゞ今罷り下り候。道行、雲霞あと遠山に越えなして、幾關々の道すがら、國々過ぎて行くほどに、こゝぞ名に負ふ隅田川、渡りに早く着きにけり。詞急ぎ候ほどに、これははや隅田川の渡りにて候。またあれを見れば、舟が出で候。急ぎ乗らばやと存じ候。いかに船頭殿、舟に乗らうずるにて候。ワキ詞「なかく」のこと、召され候

ツレ
旅人。

ワキ
渡守。

シテ
狂女。梅若丸
の母。

聞くややかに
云々

「聞くやいかに
うはの空な
る風だにも松
に音する習あ
りとは（宮内
卿。新古今
集。卷五所載）
北白河
京都府愛宕郡
白河村の舊稱

へ。まづ御出で候あとのけしからず物騒に候は、何事にて候ぞ。ツレ詞さん候、都より女物狂の下り候が、是非もなくおもしろう狂ひ候を見候よ。ワキ詞さやうに候はば暫く舟をとめて、かの物狂を待たうずるにて候。
シテサシげにや、人の親の心は闇にあらねども、子を思ふ道に迷ふとは、今こそ思ひ白雪の、道行き人に言づてて、行方を何と尋ぬらん。聞くやいかに、うはの空なる風だにも、地松に音する習あり。シテ眞葛が原の露の世に、地身を恨みてや明け暮れん。シテこれは都北白川に年経て住める女なるが、思はざる外に一人子を、人商人に誘はれて、行方を聞けば逢坂の關の東の國遠き、東とかやに下りぬと、聞くより心亂れつゝ、そなたとばかり思ひ子の、跡を尋ねて迷ふなり。歌地千里を行くも親心、子を忘れぬと聞くものを。歌もとよりも契假なる一つ世の、その内をだに添ひも

四鳥の別

鳥の子四羽が
各巣立つて別
れようとす
のを、母鳥が
送つて悲鳴し
たといふ故事
「孔子家語」に
見える。

日も暮れぬ云

「伊勢物語」の
隅田川の條に
「渡守はや舟
に乗れぬといふ
暮れぬといふ
に云々」とある

せで、こゝやかしこに親と子の、四鳥の別これなれや、尋ぬる心のはてやらん、武藏の國と下總の中にある、隅田川にも着きにけり。シテ詞なうく、我をも舟に乗せて給はりたまへ。ワキ詞おこと



狂女

乗せまじいぞとよ。シテ詞うたてやな、隅田川の渡守ならば、日も暮れぬ、舟に乗れとこそ承るべけれ。かたの如くも都のものを、舟に乗るなと承るは、隅田川の渡守とも覺えぬことな宣ひそよ。

舟ぎほふ云々
堀江の川のみ
なきはに來む
つし鳴くは都
鳥かも大伴
家持「萬葉
集」卷二十
所載

ワキ詞げに、都の人とて、名にし負ひたる優しさよ。シテ詞な
う、その詞はこなたも耳に留るものを。かの業平もこの渡りにて、
名にし負はばいざ言とはん都鳥、我が思ふ人はありやなしやと。
なう舟人、あれに白き鳥の見えたるは、都にては見馴れぬ鳥なり。
あれをば何と申し候ぞ。ワキ詞、あれこそ沖の鷗候よ。シテ詞、うた
てやな、浦にては千鳥ともいへ、鷗ともいへ、などこの隅田川にて
白き鳥をば、都鳥とは答へ給はぬ。ワキ、げに、誤り申したり。名
所には住めども心なくて、都鳥とは答へ申さで、シテ、沖の鷗と夕
波の、ワキ、昔にかへる業平も、シテ、ありやなしやと言とひしも、
ワキ、都の人を思ひ妻、シテ、わらはも東に思ひ子の、行方を問ふは
同じ心の、ワキ、妻を忍び、シテ、子を尋ぬるも、ワキ、思は同じ、シテ、こ
ひ路なれば、地、我もまた、いざ言とはん都鳥、我が思ひ子は東路
に、ありやなしやと問へども答へぬは、うたて都鳥、鄙の鳥とやい

ひてまし。げにや、舟ぎほふ堀江の川の水際に、來あつ、鳴くは都
鳥、それは難波江、これはまた、隅田川の東まで、思へば限なく遠く
も來ぬるものかな。さりとは渡守、舟こぞりて狭くとも、乗せさ
せ給へ渡守。さりとは乗せてたび候へ。ワキ詞、かゝる優しき狂
女こそ候はね。急いで舟に乗り候へ。この渡りは大事の渡りにて
候。構へて靜かに召され候へ。

ツレ詞、なう、あの向ひの柳の下に、人の多く集りて候は、何事にて
候ぞ。ワキ詞、さん候、あれは大念佛にて候。それにつきてあはれな
る物語の候。この舟の向ひへ着き候はんほどに語つて聞かせ申
さうするにて候。さても去年三月十五日、しかも今日に相當つて
候。人商人の都より、年のほど十二三ばかりなる幼きものを買取
つて奥へ下り候が、この幼きもの、いまだ習はぬ旅の疲にや、もつ
ての外に違例し、今は一足もひかれずとて、この川岸にひれ伏し

候を、なんぼう世には情なきものの候ぞ、この幼きものをば、そのまゝ路次に捨てて、商人は奥へ下つて候。さる間、この邊の人々、この幼きものの姿を見候に、由ありげに見え候ほどに、さまざまにいたはりて候へども、前世の事にもや候ひけん、たんだ弱りに弱り、既に末期と見えし時、おことはいづく、いかなる人ぞと、父の名字をも、國をも尋ねて候へば、我は都北白川に、吉田の何某と申しし人のたゞ一人子にて候が、父には後れ、母ばかりに添ひまゐらせ候ひしを、人商人にかどはされて、かやうになりゆき候。都人の足手影も懐かしう候へば、この道の邊につきこめて、しるしに柳を植ゑて賜はれと、おとなしやかに申し、念佛四五遍唱へ、終にこと終つて候。なんぼうあはれなる物語にて候ぞ、見申せば、船中にも、少々都の人もござありげに候。逆縁ながら念佛を御申し候ひて、御弔ひ候へ。よしなき長物語に舟が着いて候。疾うく御

上り候へ。ツレ詞、いかさま今日はこの所に逗留仕り候ひて、逆縁ながら念佛を申さうずるにて候。

ワキ詞、いかにこれなる狂女、何とて舟よりは下りぬぞ、急いで上り候へ。あら優しや、今の物語を聞き候ひて、落涙し候よ。なう急いで舟より上り候へ。シテ詞、なう舟人、今の物語はいつのことにて候ぞ。ワキ詞、去年三月、今日のことにて候。シテ詞、さてその兒の年は、ワキ詞、十二歳。シテ詞、主の名は、ワキ詞、梅若丸。シテ詞、父の名字は、ワキ詞、吉田の何某。シテ詞、さてその後は、親とても尋ねず、ワキ詞、親類とても尋ね來ず、シテ詞、まして母とても尋ねぬよなう、ワキ詞、思ひも寄らぬこと。シテ、なう親類とても、親とても、尋ね來ぬこそことわりなれ。その幼きものこそ、この物狂が尋ぬる子にて候へとよ。なうこれは夢かや、あらあさましや候。ワキ詞、言語道斷のことにて候ものかな。今まではよそのこととこそ存じて候へ。さ



川 田 隅

ては御身の子にて候ひけるぞや。あら痛はしや候。かの人の墓所
を見せ候べし。こなたへ御出で候へ。
シテ、今まではさりとも逢はんを頼みにこそ、知らぬ東に下りた
るに、今はこの世になき跡の、しるしばかりを見ることよ。さても
無慙や、死の縁とて、生所を去つて、東のはての道の邊の土となつ
て、春の草のみ生茂りたる、この下にこそあるらめや。地さりと
ては人々、この土をかへして、今一度この世の姿を母に見せさせ
給へや。残りても、かひあるべきは空しくて、あるはかひなきは、
きぎの、見えつ隠れつ面影の、定めなき世の習、人間憂の花盛、無常
のあらし音添ひ、生死長夜の月の影、不定の雲おほへり。げに目の
前のうき世かな。
ワキ詞、今は何と御嘆き候ひてもかひなきこと。たゞ念佛を御申
し候ひて、後世を御弔ひ候へ。既に月出で、川風も早更け過ぐる、夜

覺鐘
鉦鼓のこと。

子方
梅若丸の亡靈。

念佛の時節なればと、面々に鉦鼓を鳴らしす、むれば、シテ母は
あまりの悲しさに、念佛をさへ申さずして、たゞひれ伏して泣き
おたり。ワキ詞、うたてやな、餘の人多くましますとも、母の弔ひ給
はんをこそ、亡者も喜び給ふべけれど、鉦鼓を母にまゐらすれば、
シテ我が子のためと聞けばげに、この身も覺鐘あしやうを取上げて、ワキ
「嘆きをとゞめ、聲澄むや、シテ月の夜念佛もろ共に、ワキ心は西へ
と一筋に、二人南無や西方極樂世界、三十六萬億同號同名阿彌陀
佛。地南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ隅田川原の波風も、聲た
て添へて、地南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。シテ名にし負はば、都
鳥も音を添へて、子方地南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛。
シテ詞なう、今の念佛のうちに、まさしく我が子の聲の聞え
候、この塚の内にてありげに候よ。ワキ詞我等もさやうに聞きて
候、所詮こなたの念佛をばやめ候べし。母御一人御申し候へ。シテ

「今一聲こそ聞かまほしけれ。南無阿彌陀佛。子南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛と、地聲のうちより、幻



見えければ、シテあれは我が子か。子母にてましますかと、地互に手に手を取りかはせば、また消え消えとなりゆけば、いよ／＼思はます鏡。面影もまぼろしも、見えつ隠れつするほどに、東雲の空もほの／＼と、明けゆけばあと絶えて、我が子と見えしは塚の上の草茫々として、たゞしるしばかりの淺茅が原となるこそあはれなりけれ。

(觀世流謠曲)

三 人間生活の要素

大類 伸

史書を繙いて靜かに思を何百年何千年の昔に馳せる時、時の大いなる流は、古今東西一切のものを呑みこみ去つて、偉大な人間の思想も、事業も、すべては時の流を飾る小波に過ぎないとも思はれる。

しかし一たび書齋を出て、郊外に歩を運ぶ時、私の頭から歴史の影は漸く薄く消え去つて、自然が私の王國を占領し始めたかのやうに感ぜられる。仰いでかの碧空を眺めた時、草原に休んで萌出る緑の色に見入つた時、その澄みきつた快い色彩と、生立つ希望と力とに溢れたその光とを認めずにはゐられない。その色、その光、それは残念ながら歴史のどのページにも求められない。歴史は時の流ではあるが、そこには人間の手が働いてゐる。人

間の努力と業績とを除けば、歴史は極めて寂しいものになる。しかし今眼前に展開された自然には、人間の力の跡はない。もとよりそこには拓かれた田畑もあり、伐られた林もあらう。しかもそれは自然を飾る綾とはならうが、自然の權威を傷つけるまでには至らない。人間は自然に對してそれほど弱いのである。田舎道に沿うて流れる小川は、いかにもさゝやかではあるが、よくそれに見入つた時、史上に英名を轟かした偉人の事業も、この小川に較べて全く無意味なやうにさへ思はれる。

自然の姿に偉大な生命を感じ得ることは、即ち人間がそこに神を認めたことではあるまいか。或は神といふ代りに大なる道といつてもよい。東洋文明の理想はかゝる超人間的の力に跪くことにある。しかし一度轉じて西洋文明を顧みれば、そこには人間がすべてを征服しないではやまない傾向が著しく目立つ。或

人は、文化とは人間が自然を征服することだ。』といつたが、果してさうとすれば、西洋文明こそは、眞の文明であるやうにも考へられる。今こゝに私は東西文明の優劣を論ずるのではないが、自然と人間とを對立させて考へる時、兩者の關係が、東西の文明において、よほどその位置に差違のあることを大體認めなければならぬ。少くとも西洋文明三千年の發展史を顧みれば、我等はそこに人間の力が著しく高潮されてゐるのに氣付くのである。

しかしながら、ともかく西洋文明の力に觸れた後、我等はみづから人間であることに非常の興味をもち、それを誇と感ずるやうになつて來る。もとよりこの感じは、必ずしも西洋文明のみの賜物とは限らない。深く自己を省察すれば、等しく得らるべき感じではあるけれども、西洋文明が特にその點に強い力、或はむしろ鮮明な色彩をもつてゐるため、それから受ける感じが頗る強

いのである。かゝる魅力ある文明が、近代の日本の物質上精神上に少からぬ感動と動搖とを興へたことはいふまでもなからう。こゝに至つて我等は、大自然の前にのみ拜跪してはゐられない。あゝ人間の偉大さ、赤兒が全身の力をこめて泣く聲にも、小学校の子供が運動會の競争に一心不亂にかける姿にも、小さい努力ながらも、そこには人間としての力が十分に發揮されてゐるのである。藝術家の創作學者の研究、乃至實業家の經營、政治家の經綸にも等しく人間の偉大さを認めざるを得ない。

こゝまで考へた後に、郊外の散策から轉じて、人間の波が渦巻く都會の裏に入ると、周圍の光景は私にまた新しい感じを起させて來る。靜かな小川のさゝやきよりも、路傍の草の色や小石の形よりも、工場の薄暗い埃だらけの部屋の内で活躍する勞働者の姿に、一層深い意義が認められるやうだ。いはゆる美しい自然

よりも、醜い彼等の姿の方が一層複雑な美を現してゐるのではあるまいか。從來小さいと思つたものも、醜いと思つたものも、こゝに漸く偉大なものとなり、美しいものとなつて來る。そこで、我等は人間と生まれた以上は、みづから人間たることを誇として、この一生を立派な人間として暮すのが最も有意義であると考へる。こゝに至つて、歴史の權威も、自然の威力も、全く忘れられてしまふ。過去に煩はされず、周圍に束縛されず、まさに天馬空を馳するの意氣込で、思ふがまゝに進んで行き得るやうに思はれる。しかし人間に隨喜しつゝ、有頂天になつて進み行かうとすれば、私を引止める或物があるのに氣付く。それは決して惡魔のささやきではない。恐らく人間に何かを指令する神の聲であらう。思ふに、西洋の文明は生きることの價値を人間に教へた。さうしてその價値を無に歸せしめないために、不斷の奮闘と努力と

を人間に慫慂した。東洋の文明は、我等の生の窮極を具體的に示した。人間の努力に對して越え難い限界を劃した。生きるがためには、この制限を破らない範圍において活動せねばならぬ。かくして我等は東西兩文明から兩様の教訓を受けた。但しその一が全然正しくして、他が全然誤であるのではない。恐らく人生の姿が異なつた二方面において觀察されたに過ぎないと思ふ。自力の誇と不斷の努力とは必要であるが、同時に人間を一貫する大きな運命力も無視することは出来まい。そこに人間の努力に一の限界が置かれることとなる。さうしてまた自然が人間に對して大なる威力を揮ふことが可能となる。こゝにおいてか、一たび自然を棄てて人間にのみ没頭せんとした私も、再び仰いで蒼々たる大空に見入らねばならず、更に再び森の姿にも、一輪の花にも、路傍の小石にも至大の意義を感じて來るのである。

人間の力の絶對でないことを考へると、自然の威力に注意を拂ふやうになるが、同時に時に對する人間の關係も、また認められて來る。人間の必死の努力によつても解決されなかつた問題が、時の経過につれて自然に解決される場合は少くない。もとよりその場合にも、嚮に人間の努力があつたればこそ、それが或年月を経た後に解決されたので、たゞ時の経過のみが解決したのではない。しかし、いかに人間の努力が大なればとて、時の要素がその間に加つて來なければ解決は求められなかつたのである。こゝにおいてか、人生に對して歴史は重大となつて來る。

人事の發展推移の上に環境の力を重視する者は、即ち歴史を重んずる者である。人事の説明をその當事者なる個人に求めるよりも、その者をしてかくの如き事件を生ましめるに至つた環境に求めるの風は、史的研究の一特色である。さうしてその環境

は同時代の自然社會などに擬せられるばかりでなく、過去の長い歴史の上にも求められる。この場合、歴史の長い發展の連續は抗^{さか}ひ難い強い運命の掟のやうに、過^ま・現^ま・未^あの三世を一貫してゐる。人間はたゞその鐵則に縛られた傀儡に過ぎないかの觀がある。勿論歴史は人間の生んだ生活現象の連續に過ぎないけれども、それ等を時の經過に關聯させて考へてみると、そこに人間の手で左右することの出来ない強い發展の連續があるやうだ。さうして時の流の中においてのみ、人間の努力は有形無形の或物として示されるのである。要するに人間の終局は、時のみこれを知つてゐるのではなからうか。時の力を認める者は、歴史の權威を認める者である。私は人間と共に自然を、そして自然と共に歴史を人間生活の要素として認めたいのである。

二二 國學者の業績

岩城準太郎

「獨り燈火の下に書をひろげて、見ぬ世の人を友とすること、こよなう慰むものなれ。」とは、徒然草の名文句であるが、人間と人間とが相互に肺肝を吐露して眞實に諒解するのは、言語・文章の媒介によるのである。まだ見ぬ世界の人と魂相通ずるを得るのは、即ち「ふみ」のおかげである。

國と國と相知り、國民と國民とが相理解するのは、外交と貿易とによるのでない。相互に他の文章を読むことによる。矯飾と辭令とを剝去つた赤裸の國民は、その創作するところの文學に最もよく活躍するからである。

一國の國民がその祖先と相面接する思をするのは、過去の國民の書殘した文學を読む時である。父祖の遺文に接する時の懷

かしさはいふまでもない。江戸時代の國民、鎌倉室町時代の國民、平安時代の國民、更に溯つて上古太古の國民の、その時代々々に創作した文學を繙く時こそ、本當に我が血脈の生々相繋がる宿縁を直感するのである。

古代國民の面影を髣髴しようとするには、直接古代國民の創作したものに當らねばならぬ。その思想を知り、その感情を解し、その生活に直面しようとするには、一意その遺作・遺文を味讀するに限る。我が國民の固有せる生活の真相を、生き／＼と今日の我等に見せてくれるのは、即ち古典である、古文學である。

歲月の久しきに隨つて遺文・遺作が亡びる。時代の古きに隨つて文筆の人が少い。歴史あつて以來三千年、上世に溯れば溯るほど、典籍が稀になるのである。この稀に存する古文學こそ、本當に貴重な古代の鏡である。祖先の面影を窺ふべき大切なフィルム

である。これを書殘した上世の文學者は、數多いその代の國民から、特に選り上げられた極めて少數の代辯者であつて、風雨千歳の淘汰を経て今日に傳はつた古典は、眞に天佑によつて生命を全うした稀代の珍寶である。

かう見て來ると、古典の研究はたゞに古物いぢりの物好きでないのみならず、學問のための學問といふやうなものなきなものでもない。必要だの不必要だのといふ理窟の問題でもない。實に我等の衷心の要求からやむにやまれぬ感情の問題である。如上の意味において、自分は古典に對して限ない愛敬を捧げ、探究の念を起すのである。この點に著目し、かくの如き見解から、古典の研究を開始したものは、即ち我が國學者である。

國學者といふ名は可なり廣い意味に用ひられ、隨つて曖昧な意味に用ひられてゐる。國文學者、國語學者にも、國史學者、古典學

「菅家遺誠」
菅原道眞の遺
作といふ。

者にも、神道家、皇道家といふやうな方面にも用ひられてゐる。しかしこゝで國學者といふのは、國文學の創作家でもなく、國語の研究家でもなく、歴史家でもなく、また神道家でもない。すべてこれ等の一面を具へてはゐるが、その本領とするところは、國民的精神をもつて固有の國民生活を闡明しようとするので、その根本資料として我が古典、古文學を研究する人々である。即ち古典を通じて國民を見ようと努める學者である。

國學といふ言葉は、古く平安朝の文書菅家遺誠などに見えてゐるけれども、それは意味が違ふ。上述の意味の學風は、對外的に國民としての自覺が生じて後でなければ起らぬ。佛學あり、漢學あり、こゝに國學が起るので、漢學が漢土の道を講じ、佛學が佛敎の道理を説くので、こゝに我が國の古道を闡明しようといふ要求が起る。神道の興起はこの要求と關係はあるが、近古時代の神

慶長
後陽成天皇の
御代。

享保
中御門天皇の
御代、徳川八
代將軍吉宗の
治世。

道は、研究の方法を誤り、頭腦の向け方を知らなかつたから、まだ國學といふ特色的なものにはならなかつた。やつぱり學術的研究の實力が出来てくるのを俟たねばならなかつた。

近世江戸時代になつて、學問が始めてその體裁をなして來た。漢學にも佛學にも、學者と名づくべき者が出て來た。特に漢學の勢が盛であつた。慶長年間漢學興隆の施設をなしてから約百年、これに刺激せられて國學も始めて現れた。國學者なるもの出たのはそれからである。

國學の言葉を新しい意味に用ひたのは、荷田春滿だといはれてゐる。春滿は伏見稻荷の神官であつて、享保十三年、京都東山に學校を創立することを幕府に建議した。その啓文に始めて國學の語を用ひたのである。なほ啓文の中に皇國之學ともいひ、國家之學ともいつて、すべて同じ意義に用ひてあるが、學校の名を國

萬治
後西天皇の御
代、徳川の四代
將軍家綱の治
世。
寛文
靈元天皇の御
代、家綱の治
世。

學校と出してあるのを見ると、國學といふ方が春滿の主として用ひようとした言葉と認めてよろしい。

この意味での國學者は、萬治寛文頃からおひくゝ現れて、近く明治時代に及んでゐる。僧契沖、荷田春滿、賀茂眞淵、本居宣長、平田篤胤等は、その最も傑出した人物である。

これ等の人々の忠實熱心な研究によつて、從來暗がりの中に放置せられてゐた古典が漸次に究明せられ、我が懐かしい同胞國民の面影を、まのあたり見るが如く感ずることが出来るやうになつた。今まではせつかくの貴重な古典をもつてゐながら、言語解釋の困難であるがために祖先の心胸に觸れることが出来なかつたが、これ等學者は、まづ言語を討究し、傳説を説明し、歌謠を解釋し、史籍物語等古典の全部に亙つて啓蒙的研鑽に力めたので、我等後生がどのくらゐその餘澤に浴してゐるか計られ

ない。

我等は國學者の開いてくれた道に立つて、遠い祖先への面接に急ぐ時、しみじみ有難さを感じて、その功業を讚美しないではゐられない。



有所權作著

日本女子讀本

昭和五年二月十四日
昭和四年九月二十二日
昭和四年九月二十四日
昭和五年二月十四日

編者

高木武
東京市神田區通神保町九番地

發行者

合資會社 富山房

代表者

坂本嘉治馬

印刷所

新井電新堂

| 昭和五年年度臨時定價 | 定價 |
|------------|------------|
| 卷一—四各金六拾八錢 | 卷一—四各金四拾二錢 |
| 卷五、六各金六拾五錢 | 卷五、六各金四拾錢 |
| 卷七、八各金六拾貳錢 | 卷七、八各金參拾八錢 |

日本製

發行所 合資會社 富山房

東京市神田區通神保町九番地

電話九段一九二—一九二五番
振替口座東京五〇一番

日本女子讀本 卷八終

